

〈研究展望〉

日本文化風土論の地平

安田喜憲

I 形成期

一、気候と文明

二、東洋的風土学

II 挫折期

一、風土論の挫折

二、地域区分の限界

三、環境論の衰退

III 発展期に向かつて

一、生態史観の登場

二、地理的風土論の苦節

三、新たな地平

I 形成期

一、気候と文明

二つの文明論

なにもかもが西洋中心の時代は、終りを告げようとしていた。近代世界を担っていたヨーロッパ文明の未来に、暗いかげりが見え始めた第一次世界大戦（一九一四～一九一八）前後のことである。二〇世紀の歴史学と地理学に大きな影響を与えた二つの文明論が発表されている。

それは、オスヴァルト・シュペングラ（O. Spengler 1880～1936）の『西洋の没落』^{〔1〕}とエルスワース・ハンチントン（E. Huntington 1876～1947、ハンチントンとも呼ばれている）の『気候と文明』^{〔2〕}である。

前者は歴史学を西洋中心史観から解放した。その比較文明論

の視座は、アーノルド・トインビー (A. Toynbee 1889-1975) をして大著『歴史の研究』⁽³⁾を著すきっかけをつくった。後者は、後の研究者をして「この本ほど、読む人に地理学にもこんな興味ある分野があったのかと思わせた書物は、かつてなかった」と評させるほどに、地理学の興味を広く世間に知らしめた。

しかしこの二つの文明論は、その提立において根本的な相違があった。前者が西洋の没落を論じ、西洋中心の世界観の崩壊を鋭く予言していたのに対し、後者は白人至上主義の世界観を脱しきることができなかった。それは、その後のこの二つの文明論がいかに評価されたかをみれば、明らかである。

ハンチングトンの『気候と文明』の研究は第二次世界大戦までは、その影響力を維持しえた。しかし、大戦の敗戦を境として、その研究はもはやかえりみられなくなった。これに対し、シュペングラの『西洋の没落』は、戦後もますますその評価は高まる一方であった。シュペングラのまいた種は、トインビーによって育てられ、今や比較文明論は大きく開花しようとしている。

二つの世界大戦の発生と終了を契機として誕生・盛衰した二つの文明論の命運をはっきりとわけたのは、二人の文明論者の世界観・価値観の相違であった。

人種の偏見

ハンチングトンは、温度や湿度が人間の精神や肉体に影響を与える気候の精力と文明の分布の間に密接な関係を認めた。刺

激性気候の度合が大きい所ほど、高度の文明が發展する。刺激性気候の下に誕生した白人は、独創力、発明力、統率力に富み、その反対の黒人は忠実、犠牲、忍従が特色である。南アフリカには「劣等白人」と呼ばれる人々がいる。その多くが南アフリカ生まれらしい。南アフリカの気候は快適であるが、ヨーロッパや北アメリカに比して刺激性を欠いている。このため白人といえども、南アフリカ生まれの人々は、「劣等白人」となってしまうと指摘する。

気候の優劣が人種や民族の優劣を生むという考え方は古代ギリシア以来の素朴な環境論を出るものではなかった。にもかかわらず、時あたかも白人の熱帯地方への植民地化を正当化する理論を必要としていた。ハンチングトンの気候と文明の説は、植民地化や侵略戦争を正当化する理論にさえ悪用された。気候の刺激性と人間の精力の間に、深いかわりがあるのではないかというハンチングトンの指摘は正しい。しかし、彼が文明としたのは西洋文明であり、人間の精力は彼の属する西洋的価値観を通してみた気候の精力に他ならなかった。

気候と文明という魅力ある研究テーマが、このような一九世紀の西洋中心主義、白人至上主義の偏狭な世界観、価値観を持った人物によって世に知らしめられてしまったことは、地理学にとって大きな不幸であったと言わざるをえない。

アリストテレス以来の課題

気候と文明のかかわりの研究は、学問としての地理学が基礎

づけられて以来の古くからの課題であった。アリストテレス (Aristoteles 384~322BC) は、その著『政治学』⁽⁹⁾ の中、「寒い地方の民族は勇氣に満ちているが、思慮と技術とにかけている。暖かいアジアの民族は知的であり技術をもっているが、勇氣にかけている。ギリシアの民族はその居住地が中間の氣候帯に位置しているので、勇氣があり思慮深い」と指摘している。これは地理的風土論のはしりであると指摘される⁽¹⁾。

しかし、このアリストテレスの指摘の中にも、ハンチングトンの人種差別へとつき進む危険性が語られている。アリストテレスは、氣候に恵まれた所に生育するギリシア人が、もっともすぐれた民族だと論じている。それは刺激性に富む氣候の下に育ったヨーロッパ人や北アメリカ人が、高度の文明を發展させたというハンチングトンの指摘と、本質的にかわるものではない。

環境決定論

こうして、氣候と文明の研究は、第二次世界大戦の敗戦を境として、地理学のなかで急速に研究されなくなっていく。そして、こうした研究に対し、環境決定論という烙印が押された。そしてハンチングトンはドイツの地理学者フリードリッヒ・ラッツェル (F. Ratzel 1844~1904)⁽⁸⁾ とともに、環境決定論者の代表者にまつりあげられた。

戦後日本の地理学者が、人間の文化や生活に及ぼす環境の影響を重視する研究を、環境決定論としてことさらに排斥してき

たのは、以上のような理由からである。

そして、戦後日本の地理学会では、自らが環境決定論者として批判され、ハンチングトンと同じ反動的な思想の持ち主であるとみなされることを恐れる地理学者の増加によって、古代ギリシア以来の地理学のもっとも本質的で、もっとも魅力あるこの氣候と文明の研究に対して、正面から取り組もうとする研究者は激減した。

それは、一九世紀の西洋中心の世界観・白人至上主義の価値観を持った人物によって、この魅力ある研究テーマが世に知らしめられてしまったという悲劇にはかならなかった。

氣候順応

東北大学理学部地理学教室には、人類地理学という講義が開講されていた。能登志雄は環境決定論の代表者とみなされたラッツェルの『人類地理学 (Anthropo-geographie)⁽⁹⁾』の講義を行っていた。しかしこの講義は大学院の学生には全く人気がなかった。受講生はしだいに減り、とうとう私一人になってしまった。先生は、もうやめようとおっしゃって、この講義は途中で中止になった。

環境決定論を排斥する嵐のなかで、能はラッツェルの環境論を正当に評価し、氣候と文明の研究の重要性を指摘した数少ない地理学者の一人であった。寒冷地や熱帯氣候への人類の進出と適応・風土病の克服などを扱った『氣候順応』⁽¹⁰⁾ を著している。その著の書き出しで、この氣候順応の問題は「地理学の取り扱

う中でも最も魅力ある問題であると同時に、最も危険なテーマでもある」と述べている。気候順応の問題が地理学にとって、最も危険なテーマであると指摘した背景には、実はハンチングトンの『気候と文明』を意識してのことがあったと思われる。ハンチングトンの『気候と文明』のなかで、最も人種的偏見に満ち、白人の植民地支配を臆面もなく丸だしにしているのが、白人の熱帯への気候順応の問題を扱った部分(第三章)であるからである。「熱帯の土人は就寝・不勉強・痲癩・飲酒癖・色欲が特に顕著であり、性的放縱は目にあまる。いかに優秀な白人といえども、その影響をのがれることはできない。熱帯地域に大規模に植民を行う時は、あまり優秀でない白人を送るべきだ」⁽¹¹⁾など、その記述は、熱帯に対する無知と偏見に満ちている。

しかし、人種的偏見や白人至上主義の枠を取り払えば、気候順応は科学的地理学の魅力ある課題となる。

地球時代の到来

ここ二〇年、時代の情勢は一変した。だれもが自由に海外旅行に出かけることができるようになった。異国の風土や気候を直接肌で体験して、気候・風土の相違がいかに民族の文化や生活に大きな影響を与えているかを実感できる人が急増した。

そして、企業は円高のなか、生き残りの最後の手段として、つぎつぎと海外進出をよぎなくされている。日本とは全く異質の風土の下で、長期間生活しなければならぬ人々が急増して

いる。熱帯の気候や風土にいかに対応していくかは、日本企業の命運にもかかわってきている。

能は「新しい文明を建設することそれ自身が、気候順応の内容の一部なのである」と指摘している。国境を越えた新しい地球時代の文明へと突入しつつある現在、気候順応の問題は、再びクローズアップされ始めた。

二、東洋的風土学

船出

一九二七年の二月、和辻哲郎はヨーロッパへの旅に出た。それはハンチングトンが『気候と文明』を著してから一二年目のことであった。すでにシュベングラの『西洋の没落』はヨーロッパ世界では広く読まれていたが、日本人にとってはまだまだヨーロッパは光輝に満ちた存在であった。そして、なによりも、日本人にはまだ明治維新以来の自負が残っていた。自らの文明を世界的視野のなかで正しく位置づけ、その相違を見極める目を失ってはいなかった。第二次世界大戦の敗戦によって苛酷な自信喪失を受ける前の、一人の日本人が船出した。

モンスーン

和辻は南回り航路での体験に基づく直感から、名著『風土』⁽¹³⁾を著し、ユーラシア大陸を大きく三つの風土的类型に区分した。モンスーン、砂漠そして牧場である。

モンスーンの湿潤は人間をして「自然への対抗」⁽¹⁴⁾を断念させ

る。暑熱と結合した湿潤は自然の暴威を意味する。それは荒々しい力となって人間に襲いかかり、人間をして対抗を断念させるほどに巨大である。動植物の生に充滿した自然、生命に満ちあふれた自然が人間に襲いかかるのである。そこで人間は自然に対して受容的忍従的にならざるを得ないと指摘する。

和辻はユーラシア大陸の風土の構造の一つにモンスーンを設定し、日本をもその中に含めた。夏の大雨と冬の大雪を日本の風土の特殊性として取り上げた。現代の地理学者千葉徳爾は、「少しでも地理的な知識を厳密にもつ人ならば、それらを一ヶ所でもともにもつ土地は日本にはほとんどないことを知っている」¹⁵と和辻を批判する。確かに、夏の大雨は太平洋側南部に、冬の大雪は日本海側に特徴的である。しかし、夏の大雨も冬の大雪もともにモンスーンの活動と深く結びついてもたらされるものなのである。夏雨の多少は南西モンスーンの、冬の大雪の多少は北東モンスーンの活発・不活発がカギを握る。さらに近年の筆者らの研究は、モンスーンがヒマラヤを中心とする東アジアの大気大循環に支配され、過去数千年の間にも劇的に変動したことを明らかにした。そして、そのモンスーンの大変動が東アジアの諸文明の盛衰にも大きな影響を及ぼしていることが解明されつつある。¹⁷日本文化の変遷もまた、こうしたモンスーンの大変動の中で再検討される時に来ている。日本を含めた東アジアをモンスーンの風土でくくった和辻の視点は正しかったと私は思う。

和辻批判の中で注目すべきは、梅原猛の批判¹⁸である。梅原は、和辻が日本人が古来もっていた「自然生命的存在論」に気づいていないことを指摘した。和辻は「ヨーロッパはある意味で楽土である」と指摘する。だが本場の楽土はヨーロッパではなく、日本を含むモンスーン域にあるのかもしれない。生きとし生けるものが夢をもてる世界、それが真の楽土ではないか。人間の傲慢が自然を痛々しいまでに疲弊させてしまった現代の地球と人類の未来を救済する風土論としては、確かに「自然生命的存在論」の存在に気づかなかった和辻の風土論は現代的意味を欠く点がある。

和辻が自然の暴威の中で受容的忍従的としたモンスーン域の人々の文化や価値観が、今日再認識されつつある。二〇世紀末の現代、地球環境の危機がさげばれる中、未来の自然と人間の共存を模索する試みがつづけられている。人間の暴威が自然を圧倒したこの時代に、自然の暴威の中で自然に圧倒されながら受容的忍従的に生活してきたモンスーンアジアの人々の文化や価値意識が、未来の地球環境と文明のゆくえを救済する一つの可能性をひめたものとして再認識され始めているのである。和辻はこのような事態が引き起こされようとは、夢にも思わなかったであろう。

砂漠

和辻はアラビア半島南部のアデンの町に到着した。「人生、至るところに青山あり」という日本人の生き方が、ここでは全

く通用しない。青山どころか山には木一本、草一本はえていない。それは死の世界であつた。和辻は「ただ異様な物すごい、暗い感じのみがある」と記している。

この非青山的な人と世界とのかわりを特色づけるのは乾燥であり、対抗的戦闘的な世界観である。自然に生はなく、そこにあるのは死である。生は人間の側にしかない。そのような所では、神は人格神たらねばならなかつた。かくして、ヤールヴェは砂漠の人間の神となつた。

この指摘は興味深い。自然が生命に満ちあふれたモンスーン地帯では、人格神の誕生は少なく、むしろアニミズムの神々が後年まで残存しているからである。人格神の背後には、確かに砂漠の苛酷な風土と牧畜民のにおいがする。

さらに和辻は同じ砂漠であつても、エジプトは異なる点に注目している。エジプトはナイル川の恵みによつて、乾燥と湿潤の二重構造をもつ。エジプトの風土は乾燥なる湿潤である。このため砂漠地帯に位置しながら自然とのかわりのあり方は、砂漠の人間とは全く異なる。砂漠の民のように自然に対して征服的に働きかけるのではなく、受動的、静観的である。それはモンスーン地帯の自然と人間のかかわりに類似している。筆者はかつてエジプト文明と日本の縄文文化の自然と人間系には類似点があることを指摘した。エジプトや日本の縄文文化を自然と人間循環系の文明として、メソポタミアや地中海文明とは区別した。そして、エジプトも日本ともにアニミズムの神々が

長らく健在であつた。おそらく、こうしたエジプトと日本の基層文化の類似性の背景には、自然と人間のかかわりのベシックなあり方が、深くかかわっていると思われる。和辻はすでにそのことに気づいている。

牧場

和辻が地中海に入ったのは、日本を出航してから一ヶ月以上たった三月末のことであつた。イタリア半島南端の山々を目にして、和辻はその所々に基盤の露出した岩山の間、緑の牧草地が広がっているのを見て驚く。日本では水田の広がる低地にしかみられない草原が、山にまで広がっている。「このような山の感じは、自分には全然新しいものであつた」と記している。そして、ヨーロッパを牧場的風土として位置づける。このヨーロッパの牧場的風土は、北と南の二地域に細分される。

まず青く澄んだ地中海が死の海であることを、和辻は直感する。日本列島周辺の海が豊饒の海であるのに対し、地中海はやせ海である。日本の海が森ならば、地中海は砂漠にたとえられる。地中海は古来交通路であり、そしてそれ以上の何ものでもなかつたと記している。近年の筆者らの研究から、過去数万年の間にも、日本列島周辺の海洋環境は大きく変動し、その変化が日本列島の自然環境に重大な影響を与えたことが明らかになつてきた。日本列島の気候や森の分布は、過去一万年間における日本列島周辺の海洋環境の変動の中で大きく決定づけられた。そして海洋的の日本文明もまた、この海洋環境の変動の中で誕生

している。風土の基盤には海がある。このことを和辻は直感で感じとっていた。

和辻は「もし地中海が太平洋のごとき湿潤な海であり無数の生物を繁茂せしめ得たならば、沿岸地方の人々はあれほど動き回りはしなかつたであらう⁽²⁵⁾」と記している。

日本の縄文文化は豊饒な海が存在を背景に、特色ある文化を發展させた。もし、地中海があのようなやせ海ではなく、豊饒な海であったなら、果して地中海文明が誕生したかどうかは疑問でさえある。和辻が気づいているように、もし地中海が豊饒の海であつたら沿岸はあれほどまでに乾燥することはなく、かつ森林破壊の結果、あのような岩肌ばかりのハゲ山が出現することがなかつたことは確実である。

夏の乾燥

和辻の風土論の大きな特色は、気候風土の中で、気候の乾・湿をメルクマールとして、自然と人間のかかわりあいを論じた点にある。和辻は牧場的風土を特色づけるのは夏の乾燥であると指摘する。冬雨地帯の地中海沿岸はもちろんのこと、北西ヨーロッパの夏も乾燥する。私はこの原稿を一九八九年八月オランダのフローニンゲンの田舎町で書いている。昨夜はめずらしく風雨が強かった。翌日のテレビや新聞は、二・三ミリの降雨があり、例年にはないめずらしい大雨と報道している。北西ヨーロッパの夏は日本などモンスーン域に比べると、はるかに降雨量が少ない。今年のヨーロッパの夏は例年にない暑夏で、摂

氏二〇度を越えることが何日もある。しかし一般にフローニンゲンでは摂氏二〇度を越えるのはまれで摂氏一六度前後にとどまっている。この気温の低さのため、地中海沿岸ほど著しくは乾燥しないのである。

和辻はつづける。この夏の乾燥は雑草の繁茂を阻止する。このため雑草との闘いが不必要なヨーロッパの農業労働は安易である。それは自然が人間に対して従順であることの一つの証しである。ヨーロッパの自然は従順である。自然が従順であることは自然が合理的であることにつながる。人は自然の中から容易に規則をみいだし、自然科学が發展した。自然科学は自然が従順で合理的なヨーロッパの産物であると和辻は指摘するのである。

モンスーンに比して、ヨーロッパの自然が従順である証として、森の単純さと、林床に生息する昆虫などの種類の少なさを取り上げている。和辻が直感したように、北西ヨーロッパの森の階層構造は単純である。氷河時代に厚い大陸氷床に覆われたり、氷雪砂漠となつた北西ヨーロッパでは、アルプスによつて南下を妨げられた森林は大半が絶滅した。北西ヨーロッパの森は後氷期に入って気候が温暖化する中で、地中海沿岸からアルプスを越えて再び北上して、やっと広がった森なのである。ヨーロッパにいたっては、現在のような分布域に達したのは、ほんの三〇〇年前のことにすぎない⁽²⁶⁾。北西ヨーロッパの森は歴史の浅い森である。森林の階層構造が単純で、動物の種

類の少ないのは、こうした地史的條件が深く影響している。

これに対し、日本列島のように氷河時代にも氷床に覆われなかった所では、厳しい氷河時代の中にあっても第三紀以来の植物が生き延びることができた。このため日本の植物相は多様性に富んでいる。一度完全に森が絶滅してしまった北西ヨーロッパとは、この点が大きく相違している。

さらに和辻はつづける。温順な自然は人間にとって最も都合のよいものである。温順の半面、ヨーロッパの土地はやせている。従って一人の支配する土地の面積は広くなる。このため、ゲルマン人の時代には暗い森に覆われていたヨーロッパの土地は、人間に徹底的に征服せられ、森は破壊された。すみからすみまで人力の支配が届き、西欧にはもはや利用されない土地はほとんどないと言ってよいと指摘する。事実、ヨーロッパのナラ類やヨーロッパナの平地林は、中世以降の大開墾の中で、徹底的に破壊され、一八〇一―一九世紀には、イギリスでは国土の九〇パーセント近い森が消失し、危機的状況に達していた。⁽²⁷⁾和辻のみたヨーロッパの森の大半は一九世紀以降、人間の手によって人工的に植林されたものである。和辻は樹木が並列的に直立し、幹と幹が正確に平行線をなした整然としたドイツの森の風景を記している。これはヨーロッパの森の大半が人工林であるためである。林床に昆虫などの種類が少ないのも人工林であることと深くかかわっている。こうした中世以降のヨーロッパの森林変遷史は、花粉分析の発達によって、明白に立証できた

ものである。和辻がヨーロッパに旅行した一九二七年は、スウェーデン人フォン・ポスト (Von Post 1876―1948) によって花粉分析による森林変遷史がはじめて研究されてから、ようやく一〇年を経ただけであり、こうした知識がまだまだ広く普及していたとは思えない。和辻は、おそらく自らの直感でこう記したのであろうが、その自然を見る目には鋭いものがある。このすみずみまで利用されつくした山野をみて、和辻はこう記す、「この事実、人力をもつて容易に支配することのできない山地に充たされた我々の風土とは、非常な相違⁽²⁸⁾」であると。

このように夏の乾燥はヨーロッパの自然を温順にし、人間による自然の管理、征服を容易なものとした。そこでは自然を分析し法則を求める自然科学が発展した。⁽²⁹⁾

砂漠的風土の延長

だが北西ヨーロッパの冬は、つらく陰鬱である。冬の日光の少なさと寒さは、ただちに人間の陰鬱となる。そして、この陰鬱の苦悶が、砂漠の恐怖と共鳴して、砂漠的なキリスト教を受け入れやすいものとしたと和辻は指摘する。夏の乾燥もまた砂漠的なものを受け入れやすくした。中世以降、ヨーロッパの森が徹底的に破壊されつくしたのは、脱大地、超大地の砂漠の宗教を受け入れたことが深くかかわっている。森と人間のかかわりの歴史をみると、北西ヨーロッパの歴史もまた、メソポタミアから地中海へと受け継がれた森林破壊の文明の延長線上にある。それは森を、自然を征服し、管理し、一方的に搾取する自

然し人間搾取系の文明⁽²²⁾である。

筆者も⁽²⁷⁾こうした砂漠的風土とその延長線上に開花した文明として、ヨーロッパ文明を位置づけてきた。それはモンスーン域に開花した自然し人間循環系の文明とは大きく相違している。

自然し人間搾取系の文明が超大地、脱大地を前提としているのに対し、自然し人間循環系の文明は大地にしがみついて生きる入大地、混大地とでもいべき性格をもつ。モンスーンアジアの人々は、自然の暴威の中、大地とともに生きてきた。ヨーロッパ文明が砂漠的風土の延長線上に開花した文明であるという性格は、このように森と人間のかかわりの中において明白に認められる。

和辻はヨーロッパの三〇年戦争の激しい殺戮と残虐性の中に、砂漠的な抗戦・戦闘的性格をみる。西欧の陰鬱は、砂漠的なこうした戦闘的特性とも共鳴した。

風土への直感

和辻の風土論の一つの特色は、気候の乾・湿をベースにして、自然と人間のかかわりを論じたことであった。気候の寒・暖をベースとした風土論はこれまでにもたくさんあった。寒い所と暖かい所に生活する民族の文化や生活の相違は、ギリシア以来、人々の注目を引いてきた課題であった。しかし、和辻は、それ以上に気候の乾・湿を重視し、ユーラシア大陸を大きく三つの風土に類型化した。それは、南回り航路でヨーロッパへ旅したという、和辻の体験に基づくところが大きいであろうが、この

乾・湿をメルクマールとして風土を類型化する視点は、現代においても正しい。

現代文明のもとでは、暑さ寒さは容易に人工的に克服できるものとなった。しかし、気候の乾・湿のコントロールはむずかしい。地球の温暖化の中で、近い未来には気候の乾燥化、とりわけ冬季の降水量の減少にともなう乾燥化と水資源の枯渇は重大な課題となる。砂漠化・乾燥化の克服は、これからの人類の重大な課題である。風土を規定する重要な要因として寒・暖以上に乾・湿を重視した和辻の視点は、現代の風土論においても、なお重要な課題であり得る。人文科学の研究者でありながら、自然に対して鋭い直感をもった和辻を私は高く評価する。

和辻は人間存在の構造を規定する一つの要因として風土を把握しようとした。和辻はこう指摘する。人間の存在とはある風土の下におけるある時の断面の人間存在に他ならない。人間存在とは歴史と風土の二重構造につよく規制されており、そこでは歴史と離れた風土もなければ、風土を離れた歴史もない。人間は「過去」を背負うのではなく、特殊な「風土的過去」を背負うのであると。

この特殊な風土現象の直感から出発して、人間存在の特殊性をみきわめようとした和辻の試みが、この段階で成功したとは思われない。しかし、和辻の風土をみつめる直感が多くが正しかった。それは六〇年後の自然科学の発達がこれを立証した。

風土的限定を超えて

一五世紀の近代ルネッサンスの開幕から二〇世紀後半までの人類の歴史は、理性の光の圧倒的な勝利の歴史であったと言つてよいであろう。だが和辻は、この理性中心のヨーロッパ文明の限界を見抜いていた。牧場的風土においては理性の光がもつとも輝き、モンスーンの風土においては感情的洗練がもつとも自覚される。それらは相互に相補うことによって、風土的限定を超えることができると記している。ヨーロッパの理性中心の文明の限界を補うのは、モンスーンアジアの感性なのである。

理性中心のヨーロッパ文明の限界を見抜き、同時に自らのよつて立つ文明のすばらしさを忘れなかつたこの時代の和辻を、私は高く評価する。そこには、西洋の理性と東洋の感性が相補うことによつて、風土的限定を超えた東洋でもない西洋でもない、新しい文明の潮流を創造しうる可能性が指摘されている。

和辻は最後にこう記している。「我々は己れの国土を牧場に化することはできない。しかし我々は牧場的な性格を獲得することとはできるのである。かえつてよく我々の『勸』や『氣合』の意義が生かされ、超合理的な合理性があたかも台風のごとくに我々を吹きまくることも自覚するに至るであろう」と。時代はまさに和辻の言うように進行した。和辻の「風土的限定を超えて」の考え方は六〇年後の時代を見通していた。しかし、その前に日本は大きな挫折を体験しなければならぬ。そして、同時に和辻自身も大きな思想的挫折を体験しなければならぬ

のである。ようやく芽ばえ始めた風土論は大きな転換期をむかえるのである。

II 挫折期

一、風土論の挫折

敗戦の嵐

一九四六年の春、和辻はこう記している。「太平洋戦争の敗北によつて近代日本を担っていた世界史的な地位は潰滅した。かかる悲惨な運命を招いたのは、理智に対する蔑視、偏狭なる狂言、それに基づく人倫への無理解、特に我國の担う世界史的意義に対する恐るべき誤解などのためである。我々はこの苦い経験が無意識に終らせてはならぬ。平和国家を建立し、文化的に新しい発展を企図すべき現在の境地において、何よりもまず必要なのは、世界史の明らかなる認識の下に、我々の国家や民族性や文化を反省することである」と。敗戦の嵐の中、新たな日本の進路を見出そうとする和辻の悲愴なまでの決意が述べられている。敗戦を契機として多くの学者は価値観の転換をせまられた。偉大な哲学者和辻においても、その嵐から自由であることはできなかった。

一九四八年一二月、和辻は地理学者飯塚浩二によつて邦訳されたフランス地理学を代表するヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシエ (Paul Vidal de la Blache 1845~1918) の『人文地理学原理』⁽³²⁾

に接して、「自分の乏しい知識による風土学の歴史的考察は、全く無くもがなの感に襲われる」と記している。そしてその一文は一九四九年の『風土』の第一三刷りに際して追加され、末尾をかざる。

だが、それから四〇年が経過した現在、和辻が接して、自らの風土論は全く無くもがなの感に襲われると言わしめたブラーシユの『人文地理学原理』に記された人間中心の可能論的地理学は、人間の傲慢と自然破壊を加速度的に進行させる危険性をはらんでいたことが明らかとなった。しかし、和辻はその危険性に気づくことができなかった。敗戦の嵐は、冷静な判断を奪い、自らの風土論の真の価値を見失うまでに和辻から自信を喪失させた。

激しい地球環境の破壊が進行し、人類の存亡が問われ始めた現在、ブラーシユの人間中心の可能論的地理学では、地球の未来はおろか、人類をも救済することさえできなくなっている。戦後日本の地理学者が錦の御旗としてきたこのブラーシユの人間中心の可能論的地理学で五〇億の人間によってはちぎれんばかりになった地球時代の地理学を運行するには、明らかに限界がみえてきた。多くの批判があるとしても、まだまだ和辻の風土論の方がはるかに現代的意味がある。

敗戦の嵐は一人和辻のみを襲ったのではなかった。地理学においては、敗戦を契機とするもっと過酷な嵐が吹きすさんだ。ブラーシユの『人文地理学原理』を邦訳した飯塚浩二の場合を

みてみよう。

飯塚浩二の地理学観の転換⁽³⁴⁾

「自然と歴史の地的関連」⁽³⁵⁾「自然現象と民族の発展の歴史との間にみられる因果関係」⁽³⁶⁾の研究と訳されるリッターによって新たな生氣を与えられた「自然と人類とのあいだ、舞台と歴史とのあいだ」⁽³⁷⁾の關係の研究を、世界史の視野のなかで、地理学の重要な課題として正面から取り組んだ一人として飯塚浩二があげられる。東大経済学部の助手時代に書かれた『社会地理学の動向』⁽³⁸⁾の冒頭で、「人類社会と自然との交渉關係は、歴史的な発展の相においても把握されるべきであり、――中略――社会的・歴史的存在であるところの人間と自然環境の交渉の考察は、私にとってはしだいに歴史的関心事たりはじめた」と記している。またそれにつづく第一章『歴史と人文地理学』の中でも「人類と自然とのあいだの諸關係を人文地理学の主題とすること、生物地理学的方法に立脚すること、しかも歴史の見地の重要性を素直に承認すること」⁽³⁹⁾と記している。戦前の飯塚にとっては、社会的・歴史的存在としての人類と自然のかかわりの研究が、生涯をつらぬくかもしれない重要な課題として位置づけられている。もちろん、飯塚は、環境決定論への短絡を危惧している。一九四四年に書かれた『地理学の方法論的反省』⁽⁴⁰⁾は、環境決定論への短絡によって、このリッター以来の地理学の本質をなす命題が、実証的科学の領域を逸脱し、それと共にこの貴重な研究課題が、地理学者によってかえりみられなくなることへの恐

れを強く表明している。そして、飯塚は環境決定論への短絡を回避するために、当時注目されはじめていた生態学との関係を深めていくことの重要性を指摘する。「人類生態学としての地理学という―中略―意味において、地理学批判は地理学の生態学的研究によって基礎づけられてあるべき」⁽⁴¹⁾だとか、「人文地理学と生態学的な生物地理学とは、一応形式上の共通性をもっているわけであり、相並び得る関係にある。」⁽⁴²⁾とも述べている。当時の日本の生態学は成立期にあたり、沼田真の『生物学論』⁽⁴³⁾が引用されている。

だが戦後、飯塚の立場は一変する。近年、飯塚の学説史的展望を精力的に行っている岡田俊裕が「たとえば『地理学批判』⁽⁴⁴⁾（二九七四）では、地理的決定論への批判が全編を貫いている」と記していることから明らかなように、地理的決定論への執拗な批判がくりかえされる。そして、日本人が地理的決定論を安易に受け入れやすいのは、「環境に働きかけるものとしての人間の主体的意識が、わが国でははなはだ未成熟だったというところが、歴史的にもこのような現象を生んだとみるべきであろう。ラッツェルのな決定論を超えるどころか、ラッツェルの立場を理解しうる段階以前のものでしかない」⁽⁴⁵⁾と記している。

しかし、この飯塚の主張は陳腐でさえある。今日の環境問題、砂漠化などの根源には、飯塚が進歩的と考えた人間が自然のなかで能動的・主体的な立場を確立してきた西洋的自然観の弊害があることははや否定できない事実である。そして、「自然

と運命の力に對して、自由な人間の能動性を強調する」⁽⁴⁶⁾世界観に立脚した自然と人間のかかわりの研究では、もはや人類の未来を救えない状態になっている。飯塚がラッツェルの立場を理解しうる段階以前のものとして批評した自然のなかに同化し、没入しているような世界観・自然観がみなおされ、そうした自然観に立脚した新たな自然と人間のかかわりの研究がめざされなければならぬのである。

飯塚の戦後の執拗なまでの地理的決定論批判からは、我々は得るものが少ない。むしろ、戦前、東大の助手時代に地理学に熱い期待と夢をたくして書いた『社会地理学の動向』⁽⁴⁸⁾の方が、よほど明快であり、現代的意味がある。

環境決定論の挫折

第二次世界大戦の敗戦の嵐は和辻や飯塚にみられたような個人の価値観の転換をせまった。そしてそれは学問全体の潮流を大きく転換させた。

日本の歴史学と地理学は、敗戦の嵐の中で、大きな転換をせまられた。それは、侵略戦争の先鋒となった地政学者たちの追放と、その理論的支柱となった環境決定論と皇国史観の挫折である。環境決定論を背景とした地政学に対する思まわしい記憶から、環境決定論と聞けば、頭からナンセンスな理論であるとして、生理的に受けつけない風潮が生まれた。そしてその風潮は、今日においても、多かれ少なかれ地理学者の中には、脈々と生きつづけている。

戦後世代の私は、敗戦の混乱や忌まわしい地政学のごとは、伝聞の世界の事にすぎない。しかし大学で受けた地理学の講義を思い出して環境決定論に対するヒステリックなまでの嫌悪の態度から、大先輩の地理学者にとって、敗戦が、いかに大きなショックをもたらしたかは、容易に推察できた。

環境決定論と環境可能論

地政学と環境決定論にへきえきした戦後日本の地理学者を魅了したのは、環境可能論であった。そして環境決定論への短絡といましがつづく中で、人類史に及ぼす自然環境の影響をでさるかぎり小さく見ようとする風潮が、戦後日本の地理学観を支配した。気候と文明のかかわりや気候変動と人類史のかかわりの研究は、自らが環境決定論者のレッテルを貼られることを危惧する研究者の増加によって、戦後長らく低迷した。

地理的環境論は、環境決定論と環境可能論に大きく色わけされ、前者を代表するのがドイツの地理学者フリードリッヒ・ラッツェルであり、後者を代表するのがフランスの地理学者ポール・ヴィダル・ドゥ・ラブラーシュである。と教えられた。しかし、このラッツェルとブラーシュの環境論の間には、野間三郎⁽⁴⁷⁾も指摘するように、一方を環境決定論、他方を環境可能論として位置づけるほど決定的な相違はない。このドイツとフランスを代表する地理学者は、自然と人間の歴史との関係を地理学の主題として位置づけた、近代地理学の祖カール・リッター(C. Ritter 1779~1859) のもとにも忠実な継承者であり、人文地

理学における生物学的手法を重視する点においても、類似した点が多い。ブラーシュはラッツェルからの強い影響の下に自らの地理学観を確立している⁽⁴⁸⁾。その二人の環境論が、環境決定論と環境可能論の色メカネで明白に色わけされ、相反するものとして位置づけられてしまったことは、戦後の日本の風土論の展開において、大きな不幸であった。

第二次世界大戦の忌まわしい地政学の理論的支柱として悪用されたラッツェルの環境論に対決するものとして、地理学は環境決定論ではないのだということを世に知らせるための役割を担って登場して来た環境可能論は、ブラーシュの真意とはかわりなく、人間中心の地理学的側面を強調せざるを得なかった。そして時あたかも、高度経済成長期のなかで、日本の未来がバラ色に輝いていた時代、この環境可能論の考え方が、その発展にとって最も重要な前提となっていると指摘される社会地理学やアナル学派と決別した地域地理学が注目をあび、しだいに全盛期を迎えることになる。人間の環境改変者としての側面を重視する環境可能論を貫くものは、機械論的自然観であり、それは一面において人間の思いあがりの地理学の側面を有していた。自然を人間の側の価値観によってのみ、人間の都合のよいように改変し得る側面に光を当てた地理学が、公害列島日本を生みだす一翼を担っていた事実にも目を向ける必要がある。一九六〇年代後半に始まる高度経済成長の中で、開発主義に便乗した地域学は、はなばなしの展開をとげた。工業立地論が

全盛を誇ったのもこの時代である。さらに人口の都市集中にもなう過疎や離村の研究もこの時代を特徴づけている。一方、高度経済成長の中で日本の伝統的文化が失われ、自然が破壊された。一九七〇年代前半には、公害列島日本が現出し、再び環境と人間のかかわりが注目された。「地域開発は環境保全を至上として行われなければならないこと。環境保全を完全に実現し得るような地域開発のみが今後のものである」⁽⁴⁹⁾ことが指摘された。しかし、その時にはもはや環境問題は、地理学の独占物ではなく、生態学や地球化学に主導権をうばわれてしまっていた。地域主義に傾倒していた地理学においては、環境問題に正面から取り組む人が少なかつたことと、さしせまっていた問題に対応できるだけの分析的手法をもたなかつたことなどが、生態学や地球化学に遅れをとった原因であろう。

戦後四〇年の日本

戦後四〇年の日本の地理的環境論の軌跡を振り返る時、アナール学派と決別したフランス学派の可能論的地域地理学や社会地理学とマルクス主義史観に立脚する社会構成史観が日本の歴史学や地理学に与えた影響は、おどろくほど類似している。

マルクス主義史観も可能論的地域地理学も、第二次世界大戦の敗戦を契機とした従来の日本主義に立脚した地理学や歴史学の完全な否定の上に発展の足がかりを与えられたこと。それらを買くものは機械論的自然観であり、人間中心の歴史観であり、神—人—自然というタテ系列のキリスト教的世界観に裏づけき

れた自然支配の思想ではなかつたか。そしてその背景には、一七世紀の科学革命を契機とする自然科学の進歩と一八世紀の産業革命による物質的・精神的豊かさの中でつちかわれた人類は明るい未来に向かつて限りなく進歩するという進歩史観が横たわっていたのではないか。

環境可能論の考え方が、その発展にとって最も重要な前提をもたらししていると指摘される社会地理学⁽⁴⁸⁾や、地域地理学は、根本的な面において進歩史観と自然—人間系におけるキリスト教的の世界観を完全に脱しきっていないと思われる。そうした地理学を日本に導入しようとする姿勢の中からは、西欧文明にかわる新たな世界観や文明概念を提示できるような「日本の科学」としての地理学を樹立しようとする発想は生まれにくいのではなからうか。

人間のあくなき自然破壊の中で、危機の時代を迎えつつあるかに見える今日、環境可能論を出発の前提とする社会地理学やアナール学派と決別した人間中心の地域地理学では、地球の自然はおろか、人間さえも救えない状態におちいつていることに気づくべき時ではなからうか。

誰もがこの青い地球が有限であることを、はっきりと視覚で把握することができる時、広大な宇宙空間の中で、唯一地球のみ生物社会が維持されていることを知ったとき、人類の自然環境の改変と開発にはつきりと限界が見えてきたとき、もはや自然支配の環境可能論からは、この自然と人間のかかわりあい

の危機の時代を救済する道は見えてこない。

転換期の地理学

自然と人間の関係のあまりの複雑さに手をやいた戦後日本の地理学者は、関係の科学としての側面を切り捨て、地域主義へと深く傾倒していったと言われている。⁵⁰その底流には、第二次世界大戦の敗戦を契機とする環境決定論への拒否反応が深くかわつていたように思われる。環境決定論への著しい拒否反応が、自然と人間のかかわりあいの研究、舞台と歴史とのあいだの相関関係の研究はやめにするという、一つの口実になった。敗戦を契機として、社会的・歴史的存在としての人類と自然環境のかかわりの研究は、自らが環境決定論者の烙印を押されることを危惧する地理学者の増加によって、しだいに重視されなくなつていた。そして、戦後の学問の専門分化は、これに拍車をかけた。

皇国史観への反省のなから戦後日本の歴史学が、マルクス史観・社会構成史観へと大きく転向したのと同じように、地理学と環境決定論をヒステリックなまでに拒否した日本の地理学は、地域主義偏重の道をつき進んだ。そして、「地理学の唯一の絶対的研究対象は地域である」⁵¹とまで言明されるようになった。

ところが戦後日本の地域主義、地域地理学の発展を支えた地誌学の内部からさえも、分析偏重や全体性の欠如といったいくつかの問題が指摘されるようになった。フィールドを忘れた抽

象的な空間論議は、過重なまでの地域主義偏重の申し子ではなかったか。地域とは数式や論理学で割り切れるような抽象的空間ではなく、実態のある生きられた空間であることに、再び人々は気づきはじめた。そして、いまや「従来の場所の科学としての地理学から、人間の科学としての地理学」に地域地理学は大きく転向しつつあるという。⁵²それはくしくも、戦後四〇年、日本の歴史学を支えてきたマルクス史観や社会構成史観が、今、大きな転換をせまられている時代と、ほぼ時を同じくして起きている。

地域地理学が「人間の科学」としてよそおいを新たに発展できるかどうかは、一抹の不安を禁じえないが、地人相関論から地域の科学へ、そして今や人間の科学へと転回をはかろうとする地理学が、「さまよえる小羊」とならないためにも、この転換期に地理学者は、地理学本来の命題とは何であつたかをみつめなおし、地理学とは何であつたかを問い直してみる必要なのではなからうか。

戦後日本の歴史学が、マルクス史観・社会構成史観へと大きく転回したことが、日本人の歴史理解に、真にブラスの意味のみをもたらしたかどうか、問われはじめている。⁵³戦後、環境論を切り捨て、地域主義へと大きく転向した日本の地理学が、地理学の発展に真にブラスの意味のみをもたらしたかどうか、検討されなければならないのではなからうか。

これまでの地理学者の新たなパラダイムを模索する動きのい

くつかは、既存の研究にあきたらぬというのではなく、自ら
が着手してきた研究にゆきづまり、挫折した人々によって唱え
られている場合があることに気づく。新たなパラダイムの提唱
は、一面において自らの研究の挫折とゆきづまりの、体のよい
すりかえの側面を有しているのではなからうか。これまで着手
してきた研究を十分に完成させることなく、新たなパラダイム
に転換することを許す学問的風土が、総合的な科学としての地
理学であると思われてはならない。それは科学としての地理学
の質の低下につながるからである。地形の研究者がいつのまに
か集落や農村の研究者となっていたりする場合がある。そのこ
とが、自然と人間の総合化につながるという神話と甘えの構造
は、このへんで打破しなければならぬ。地形学の分野におい
て自らの学問を大成することのできなかつた研究者が、集落や
文化の研究（かりにそれが海外の研究であったとしても）に手
を広めたからといって、それが自然と人間の関係の科学として
の地理学の発展に役立つとは言えないであろう。むしろ地理学
の甘さをより強調する結果に終る場合の方が多い。

安易なパラダイムの転換は、地理学を「さまよえる小羊」か
ら「夢を食べるバク」に変える。

二、地域区分の限界

一冊の本

大学に入ってまもないころ、薄暗い図書館のかたすみで一冊

の本を発見したときの感激は、今もはっきりと記憶している。
それは藤岡謙二郎著『先史地域及び都市域の研究』⁽³³⁾であった。

この一冊の本との出会いが、私の将来の進路を決定する大きな
要因となった。その中で、藤岡は時の断面投影比較説を提示し
「先史地理学の究極の目的は、先史時代の地域性の認識にあり
と考へ、(中略)最後には先史地域を地域区分することが必要
となってくる」⁽³⁴⁾とし、地域性の認識理解を先史地理学の究極の
目的とし、その最後の結果として地域区分が位置づけられてい
る。そして、中部地方を一つの例として、先史時代における中
部地方を大きく三大地域に区分し、さらにそれを一五の小地域
に区分している。筆者にとっては、先史地域を区分するに至る
までの、自然史と人類史に共に目を配り、自然環境の変遷と人
類の文化・生活とのかかわりを重視する歴史復元のプロセス・
地域性認識へのプロセスは、新しい発見であり、強烈な印象を
受けた。しかし、最後の結果が地域区分の一枚の図として提示
されていることに、あきたらぬものを禁じ得なかつた。地域区
分が果して地理学の終極の目的としていいのだろうかと疑問に
かられ、それが最終目標であるということは、あまりにも寂し
いことではないかと悩んでいたころ、一冊の本を知った。それ
は、今西錦司著『生物社会の論理』⁽³⁵⁾である。その中で今西は、
生物地理学が生物地理区の区分に最終的な目標をおいているよ
うでは、真の科学たり得ないことを、明快に論じていた。そこ
に述べられた生物地理区分の限界に関する説明を、地理学の地

域区分に関する限界を説明するために借用して以下に紹介してみたい。

地域区分の限界

地域を構成する要素は地形・気候・水から動植物・人間に至るまで、多様である。そして、これらの地域の構成単位は、ばらばらにあるのではない。そこには何らかの秩序があり、それを歴史理解を取り入れた系統学の上に解き明かすことが必要である。しかし、地域の構成要素の一つ一つの系統的な序列や関連を歴史的に位置づけることは、並大抵のことではない。莫大な数に及ぶ生物の種と地形や気候の関連を探り、その間に共通性を認めて地域区分することは、やってみなくてはならないが、実はばかばかしく骨の折れることなのである。⁽³⁶⁾ 今日の地理学者の地域区分もまた、全ての地域構成要素からみた区分には、はるかに違い。先史地理学の究極の目標が、先史時代の地域区分にあると言っても、それは気の遠くなるような事である。研究が進展し情報量が多くなればなる程、地域区分はますます困難となる。高度情報化社会の現代においては、地域の構成要素は莫大な量に達し、それらを総合した地域区分をすることは、とうてい不可能である。都市に比して情報量はまだ少ない農村においてさえ、ダイコンやハクサイ、ゴボウの地域区分は可能であつても、それらを総合した農村地理学の区分は、並大抵のことではないであらう。地理学が地域区分を最終の目標にする限り、ダイコンの地理学は可能であつても、農村の地理学の存

立は不可能に近いのではなからうか。自らの設定した地域区分が、他人の見解と合わない場合がたびたびあり、境界線をめぐる果てしない不毛の論争が展開されることになる。地域区分を最終目標とする科学は、果てしない迷妄の闇の中で、とどまることを知らない。今西の言葉を借りれば、地域区分が究極の目標というよりも、それぞれの個々の地域構成要素の間に、整合性がみられるか、みられるとしたらその要因は何かということ議論している段階なのである。今西は「分類学者が生物地理学にたずさわる限り、これは生物地理学の自己崩壊ではなからうか。キク科の地理やネズミ科の地理学は成り立っても、これを総合し、生物の全種類をみわたしたところから、なんらかの結論を得ようとする生物地理学の再建は、これを今日の職人化した分類学者に望んでも無理であらう」と論じている。地域区分を究極の目標とする地理学者が、歴史地理学や先史地理学にたずさわる限り、全体をみわたしたところから何らかの結論を得ようとする歴史地理や先史地理の再建はむずかしい。遺跡分布の地域区分、土器分布の地域区分、人口分布の地域区分は成り立ってもこれを総合し、自然と人間の全体をみわたしたところから体系づけ、何らかの結論を得ようとする先史地理・歴史地理学の再建は、地域区分を究極の目標とする地理学者には、望んでも無理であらう。

このように、地域区分を究極の目標とする生物地理学と先史地理学のゆきづまりは、きわめて類似した様相の中であらう。

ことができるであろう。今西は生物地理学のゆきづまりの中から、生態学への必然的な発展を明快に論じている。地域区分を究極の目標とした先史地理学もまた、先史生態学 (Praehistoric Ecology) あるいは古生態地理学 (Palaeoecological Geography) に変身することによって、その自己崩壊を回避しなければならなくなっている。それは、とりもなおさずリッターによって生氣を与えられた自然と人類のかかわりをより重視すること、自然と人間に同時に目を向けることを意味する。

三、環境論の衰退

環境論衰退の過程

地域論のはなばなしい展開の中で、環境決定論へのいましめがつづいた。自然と人間という二元的性格に根ざした自然環境と人類のかかわりあいの研究は、しだいに地理学の中心課題から離脱していった。その過程は地理学講座の中に取りあげられた環境論の取り扱いを見れば、一目瞭然である。

一九五五年の朝倉新地理学講座第二巻(辻村編)⁽⁵⁸⁾では、野間三郎と堀川侃が環境論の章を執筆している。その中で、「人文地理学をマルトヌの精神において生物地理学の一部門として扱うことも不可能でない⁽⁶⁰⁾」とか、「地理学の全体系は環境論を中核として渦まいているのだ⁽⁶¹⁾」というような現代の地域主義におちいった人文地理学者には、とうてい実感をもって理解できないであろう表現が見られる。さらに「(環境)可能論者は、

寒地や不毛地に耕作が展開されるに至った例をもって人間の自然に対する影響を主張する。しかしこれも自然のさだめた限界内でのことにすぎず、人間は決して自由な存在ではない⁽⁶²⁾」「自然と人間は征服か服従かの関係におかれる対立物でなく、人間は自然と協力すべきものである⁽⁶³⁾」という。後述する環境調和論に相通じる思想が展開されている。こうした視点は、一九五七年の河出書房版現代地理学講座の第一巻(多田・石田編)⁽⁶⁴⁾の中の、西村嘉助による「自然環境の包括性は神通力を得たと思つた孫悟空が大活躍の末、気がついた時にはまだその掌中を出ていなかったという釈迦の掌のごときものになとえることができよう⁽⁶⁵⁾」という指摘とも相通じるものがある。この河出書房版現代地理学講座第一巻自然と社会の中には、この他に実に六編もの環境論に関する論考が載せられている。

ところが、一九六七年の朝倉地理学講座第一巻地理学総論(木内・西川編)⁽⁶⁶⁾では、地域概念と地域学的考察、地理的分布、形態と発生の後に、地理的環境が堀川侃によって執筆されている⁽⁶⁷⁾。しかし、そこにおける環境論の取り扱いには、地域論・景観論・地誌学とともに、地理学の一部門にすぎなくなっている。一九五〇年代の環境論の隆盛期に比して、一九六〇年代後半以降、環境論は低迷期に入ったことを、この事實は物語っている。そしてその背景には、一九六〇年代後半以降、日本が高度経済成長期に突入し、開発主導型の地域主義が、しだいに地理学の中に大きな影響力を持ち始めた時代の精神をよみとることがで

きる。

体のよいすり替え

この堀川の地理的環境につづいて地誌学の章が能登志雄によって執筆されている。その中で能は「自然条件が基盤となってその上に人類の活動が展開されるという事実は、一見してきわめて明確な因果関係のように思われる。この関係を追求する」とは地理学が早くから行ってきたことであり、現在もそれが地理学の主要な課題であることにはかわりない。しかしこの関係の本質はそれほど単純・明かきではない。……この関係のもつひじょうな複雑さのためにそのいづれもが十分には成功して「ない」と記している。自然と人間の関係の複雑さのために、そのいづれの研究もが十分に成功していないために、しだいに地理学の主要課題から離脱していかざるを得ないプロセスが語られている。こうして複雑をきわめる自然と人間の関係の袋小路からなんとか抜け出そうとして、登場してきたのが、実は地域という概念であった。地理学が本質的に持っている、自然と人間という宿命的な二元性を、総合的な地域という概念の中に一元化し、これを対象とする独自の学問として地理学を考える。そうした姿勢が、一九五〇年代の環境論中心の時代から、一九六〇年代後半以降の地域論中心の時代への変換点において、地理学者達がとった姿勢であった。この能の一文の中に、地域という概念が地理学の中に登場してこなければならなかった必然性が明白に語られている。

そして一九八五年に発行された朝倉地理学講座第九卷人文地理学総論（浮田繩⁶⁹）では、人文地域総論といつてもよいほどに地域主義が全面に押し出され、環境論はとうとう人文地理学の中から姿を消してしまった。その中で浮田典良は「かつて地理学は、自然と人間の関係、自然環境と社会との交互作用を研究するものと考えられていたこともあった。地人相関の理法などと称したのはそれである。（中略）ところが、地理学の研究対象は、そのような関係や交互作用ではなく、あくまで地域だとする考え方が、第二次世界大戦後は有力になり、現在では、少なくともわが国の地理学会では、完全な共通理解に達しているように思われる」と述べている。ここでは自然と人間の関係の研究は、もはや過去の遺物として取り扱われており、自然と人間の関係を究明することを目的とする者にとっては、言うべき言葉を失う。

しかし、地域という概念の発達は、実は自然と人間の関係のあまりの複雑さに手をやいた地理学者が、その袋小路からのがれるために考えたしつた苦肉の策であったという側面を、いまだ一度思い出す必要もあるのではなからうか。そこには複雑な自然と人間の関係の研究に手をやき、その研究に敗北した地理学者達の体のよいすり替えの側面があったことも忘れてはならないであろう。はなばなししい地域論の展開の背景には、実は地理学の関係科学としての敗北と、退行現象が隠されている事実にも目を向ける必要があるのではなからうか。

自然と人間という地理学の二元的性格を放棄しなければならなかった背景には、戦後日本の学問の専門分化があげられよう。だからといって、地理学は地域を研究する学問であって、自然環境と社会との交互作用を研究するものではやなくなったとするのは、リッター以来の輝かしい地理学の伝統に目を閉ざすことになりはしないか。それは地理学者が果そうとして果し得なかったいまだ未開拓の分野が山積し、未来に可能性が残されている自然と人間の関係の研究に、道を閉ざすことにもなりかねないのでなからうか。現代の日本の地理学をリードされている諸先学に、いまま少しの寛容の精神をお願いしたい。

現代の地理学者にかつて「地理学の全体系は環境論を中核として渦まいているのだ」と高らかにうたいあげた自信は、いったいどこへ行ってしまったのであろうか。

かくして、日本の風土論の発展は第二次世界大戦の敗戦を契機とする環境決定論の挫折と、戦後の地域主義台頭による環境論の衰退の中で、大きく頓挫することになった。

III 発展期に向かつて

一、生態史観の登場

文明の生態史観

和辻によって世に問われた風土論は、第二次世界大戦の敗戦の嵐の中で挫折した。日本の地理学は、地・人相関論を切り捨

て、グローバリズムと国際性を喪失して、ミクロな地域研究に拘泥していった。そうした中で、一つの新しい歴史観が提唱された。それは梅棹忠夫による生態史観⁽²⁾である。それは、生態学という自然科学とのむすびつきにおいて、ユーラシア大陸の風土と歴史の見取図を、明快に理解しやすい地図で説明した。梅棹はユーラシア大陸を第一地域と第二地域に区分し、第一地域にユーラシア大陸の東端の日本と、西端の西ヨーロッパを位置づけ、中央に乾燥地帯の第二地域を配置した。第二地域の中は、中国世界、インド世界、ロシア世界、地中海・イスラム世界の四大ブロックに区分される。敗戦で大きく自信を喪失していた高度経済成長期以前の日本人にとって、それは夢想だにしなかったことであり、知的ショックを与えたとともに、敗戦後の日本人に自信をとりもどさせる源泉ともなった。それから三〇年を経た今日、日本の国際的地位は、梅棹の予見が正しかったことを立証した。

歴史観としての梅棹の生態史観の人類史的意義については、⁽³⁾前著で詳しく論じたのでここではくりかえさない。ここで注目したいのは、梅棹の生態史観が実は和辻の風土論の再来であるという点である。和辻が『風土』⁽⁴⁾を著して以来、ユーラシア大陸の風土と歴史を、グローバルな観点から明白に論じた風土論は出なかった。この梅棹の生態史観の登場によって、戦後はじめてユーラシア大陸という空間的枠組と世界史を視野に入れた風土論への道が開かれた。それは和辻以来久しく途絶えていた

グローバリズムに立脚した日本文化風土論への新たな幕開きであった。

和辻はユーラシア大陸をモンスーン、砂漠、牧場の三つの類型に区分した。梅棹の見取図もまた、見方をかえればユーラシア大陸を三類型に区分したことになる。ただ梅棹の場合、ユーラシア大陸の東端と西端によりつよい類似性、歴史的平行進化をみとめた。ヨーロッパに和辻はあこがれを、梅棹は相似性をみとめた。和辻によって先鞭がつけられたユーラシア大陸の風土史観は、梅棹によって生態史観という名のもとに、新たな展開へと導かれたと言えよう。

文明地図の作成

ハンチングトンの文明地図(図1)が環境決定論の名のもとに、はげしい批判をあびてから、文明地図は長らく描かれることはなかった。梅棹の提示したユーラシア大陸の見取図(図2)は、ハンチングトン以来、久しく描かれることがなかった文明地図作成の一つの試みであったと思う。こうした文明地図の作成を試みたもう一人の地理学の研究者は、川喜田二郎である。

川喜田は文明の理解において、地理的環境が決して無視できないものであることを、広汎なフィールドワークの上に、明快に指摘した。文化と環境のかかわりあいの研究は、大興安嶺の探検以来、川喜田の脳裏をかたときも離れることはなかったと思われる。それが結実したのはヒマラヤの研究⁽⁷³⁾であった。ネパ

ールヒマラヤでは垂直構造に依りて、さまざまな文化集団、民族が住みわけている。いちばん低い所はヒンズー文明の世界で、その文明圏は海拔一二〇〇メートルにまで及ぶ。

一方、海拔三〇〇〇メートル以上の高地は、ラマ教徒のチベット文明圏である。そして両者の中間の海拔一二〇〇メートルから三〇〇〇メートルの間には、ライ族、リンブー族、タマン族など民族固有の素朴文化を持ちながら、ヒンズー文明やチベット文明の高度に発達した文化の影響をも受けた重層文化の民が生活する。川喜田はこうしたネパールヒマラヤで得た調査成果をもとに、「素朴」から「文明」へと発展する文化発展の三段階二コース説を提示した。すなわち素朴文化から亜文明段階をへて文明へとたどりつく自発内部的なオートジェニックコースと、近隣の高い文化の衝撃を多分に受けて、それを吸収しつつ素朴文化から重層文化をへて文明にたどりつくアロジェニックコースである。そして、最終的にユーラシア大陸の文明地図を描く。縦軸に温度を、横軸に乾・湿を配置した方形の気候帯に対応して、ヒンズー、イスラム、中国、チベットの四大文明と素朴文化が配列されている(図3)。アロジェニックコースをとるヨーロッパと日本は、この図(図3)には描かれない。

川喜田の文明地図は、梅棹の第二地域の文明を類型化、パターン化したものとみなすこともできる。しかし、その文明の発展段階の位置づけは相違している。梅棹は第一地域の日本と西ヨーロッパは、サクセッションが順序よく進行したオートジェ

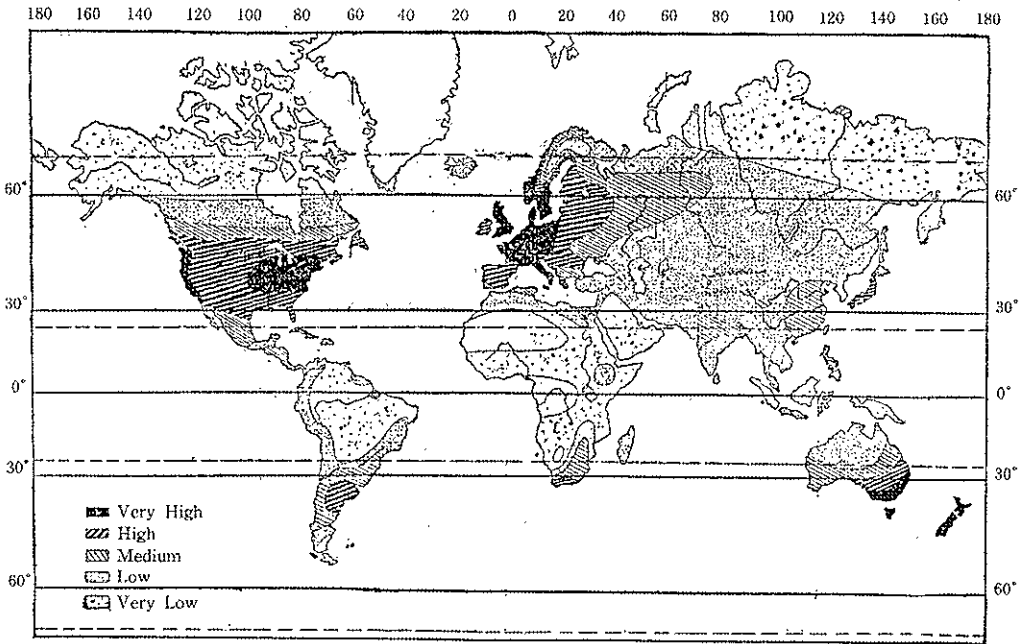


図1 ハンチングトンの文明地図 (Huntington 1915、1971)

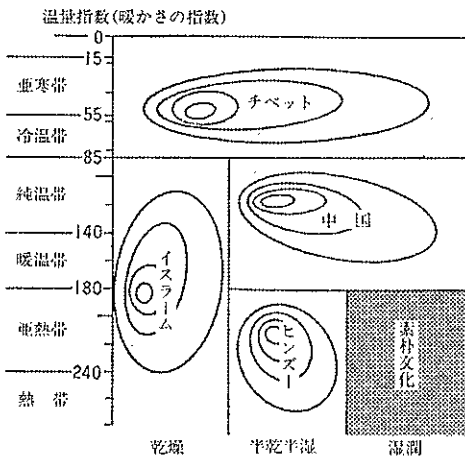


図3 川喜田三郎の文明地図 (川喜田1987)

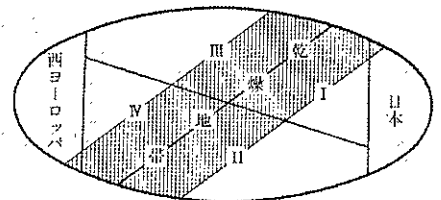


図2 梅村忠夫の文明地図 (梅村1967)

ニックな地域であるのに対し、第二地域はその歴史が外部からの力によって動かされ、アロジエニックなサクセッションを経た地域であると指摘した。一方、川喜田は日本やヨーロッパを重層文化の段階を経たアロジエニックコースをとった地域とし、それ以外のヒンズー、イスラム、中国、チベットの四大文明をオートジェニックコースを経たものとして位置づけている。

このように梅棹と川喜田の文明地図には、相違が認められるものの、二人ともこうした環境と文化とのかかわりを論じる立場に対して「文明の生態史観」⁽⁷¹⁾「生態史的アプローチ」⁽⁷⁴⁾という名を与えている。生態史観は、自然と人間の関係の科学としての風土論を推進するにあたって、重要な方法論となりつつある。

梅棹はユーラシア大陸を長門にみため、川喜田は方形の氣候の座標軸の上で、文明の生態史観を展開し、文明地図を作成した。生態史観の提立には、座標軸が必要である。筆者も近著⁽⁷²⁾において、ユーラシア大陸の文明の盛衰を包括的に理解できる座標軸として、オークロードを提唱した。

川喜田の氣候を座標軸としたユーラシア大陸の文明地図は、ヒマラヤを中心とする具体的なフィールドワークに裏づけられたものである。戦後日本のグローバルな風土論の幕開きをつけると、フィールドワークは、ヒマラヤで開始された。後述する中尾佐助⁽⁷³⁾の照葉樹林文化論の着想もまた、ヒマラヤでの調査においてであった。

ハンチングトンと梅棹、川喜田の文明地図を比較してみると

(図1・2・3)、歴史観、世界観の相違によって、ユーラシア大陸の諸文明の位置づけが相違しているのがおもしろい。文明地図には、その作者の生きた時代の精神が投影されている。文明地図には作者の生きた時代の偏見が語られている。

川喜田はかつて「私は日本の地理学界がこの一見異端の流れに、いますこし寛大ならんことを望んでいる」⁽⁷⁶⁾と記したことがある。もしこの川喜田が異端の流れではなく、日本の地理学をリードする立場にあったなら、地理学とりわけ人文地理学は、もっと魅力ある分野になっていたにちがいない。誠に残念である。地域の個性を追求する人文地理学のゴールが、抽象的な空間論議ではなく、野外調査に裏付けられた魅力ある実証科学としての風土論の発展をもたらしたであろう。

しかし、今からでも遅くはあるまい。抽象的な空間論議の袋小路のなかで、道を失ったかに見える地理学に、「文明の生態史的研究」⁽⁷⁷⁾は、未来の一つの道標をもたらしてくれるにちがいない。

森林帯文化論

戦後日本の世界史的視野に立ったグローバルな風土論の復興にあたって今西錦司を中心とする京都大学人文科学研究所の果たした役割はきわめて大きい。中尾佐助⁽⁷⁸⁾や佐々木高明⁽⁷⁹⁾によって提唱・発展された照葉樹林文化論は、戦後日本の東洋的風土学のはじめの具体的・実証的研究であった。中尾によって先鞭がつけられた森林帯文化論や農耕文化風土論の研究は、人文科学

研究所での今西の組織した共同研究の一つの成果であり、戦後日本のグローバルな視野での日本文化風土論を代表するものである。こうした森林帯文化論や農業文化風土論⁷⁶については、近著⁷⁷ですでに詳述しているので、ここではくり返さない。

二、地理的風土論の苦節

風土産業

敗戦直後の一九四七年、地理学者三沢勝範の論文をまとめた『風土産業』⁷⁸が刊行された。編集にあたった河角廣はその序に「我が国は今未曾有の艱難に際会している。しかし歴史は我々を力づける。国敗れて山河ありの感慨は我が国の事ではない、半減した国土も有効に活用すれば決して絶望ではない。風土の特色をいかした風土産業を育成することによって、新日本の再生をはかるう」と記している。

戦後日本の地理的風土論は、この三沢の『風土産業』に明示されているような、地方の低温、雪、冷水、風などの局地的風土現象を、いかに生活に役立てるかといった発想から出発した。ミクロな地域の特色を生かした風土産業の育成を目ざしたい気方は、そのまま戦後日本の地理学のいき方に直結していた。ミクロな地域研究が進行した。和辻のようなユーラシア大陸の風土を大きく三類型に区分するなどという議論は、地理学者には荒唐無稽にさえ思えた。戦後日本の風土論はこうした微細な地域性の究明に深く拘泥していった。半減した国土で生きのびる

ためには、目は閉塞的に国内に集中せざるをえなかった。もちろん千葉⁷⁹が和辻を批判したように（第一部参照）、グローバルな領域研究は風土論の両輪である。グローバルな風土論はミクロな地域の風土研究の積重ねの上に立って論じられなければならない。そうした実証的風土論は吉野正敏の近著『風の世界』⁸⁰によく示されている。そこではミクロな局地風から出発してマクロな季節風にいたるまで、風の気候学的な研究を軸とした風土論がみごとに展開されている。三沢以来の風土論の伝統がグローバルな視野の中に生かされている。

日本の経済成長は、海外での学術調査の機会を飛躍的に増大させてくれた。海外での局地的な風土研究を積重ねて真の意味でのグローバルな風土論を展開することも夢ではなくなった。風土論はまさに地球時代、国際化時代にふさわしい学問分野である。

我々はまことにめぐまれた環境の下に、風土論の研究を遂行できるようになった。しかし、これまでにも困難な研究条件のなかで、風土論の研究にとり組んできた地理学者がいる。その苦節の足跡をふりかえる中から、新たな未来への地平を展望してみたい。

気候と文明・気候と歴史の研究

自然と人間の関係のもつ複雑さと研究の困難さのため、自然と人間の関係を追求する学問として地理学が負っている宿命的

二元性を、地域という形で一元化し、地誌学の中に自らの生きべき道をめざした能登志雄が、実はラッツェルの人類地理学に深い造詣をもち、そのラッツェルの環境論の正当な評価をだれよりも強く願っていた人であったことは、すでに述べた。

能は、その著『気候順応』の中で「地理学の本質は自然と人間の関係を追求することにあるのであって、自然の中に人類を見出すことや、人類を通じて自然を把握することではない」と明白に記している。その気候順応の骨子は、気候環境を固定したものととらえ、人類の適応を取り扱ったものであるが、人類の側における適応とともに、気候も変化する要因として取り扱う必要性を述べ、将来は気候順応と気候変化の関連を、より確実な論拠に立って検討できることに期待をよせている。「気候変化は地質時代だけでなく、歴史時代に入ってからくり返されている。そして気候の変化が、人類および人類の生活に大きな影響を与え、歴史を動かす陰の力になっていたことも疑いをいれない」と気候変動の人類史への影響を重視している。

歴史時代の気候変化と人類史のかかわりを、もっとも適確にかつ、当時のでき得る限りの自然科学的手法を動員して明らかにしたのが保柳睦美である。四〇年以上も前に出版された『北支・蒙古の地理』⁽⁸³⁾には、「北支那平野の生成」・「黄土地域の過去の森と消滅」・「農業開発と土壌侵蝕」・「気候変化と年輪分析」など、自然環境と人類のかかわりにおいて、今日我々が直面している問題が取り扱われている。なかでも西域の歴史時代

の気候変化とそれにとまらぬシルクロード地帯の変遷の研究は、西域というロマンに満ちたフィールドとも相まって、自然環境の変遷と人類史のかかわりの研究の一つの金字塔をなしている。西域というフィールドは、保柳のアプローチが環境決定論の批判の攻撃の矢をかわすだけに魅力的であった。その中で保柳は、「これまでの研究のように、過去の記録や発掘資料を主体としたものには、地理学の観点からは何か欠けているように感ずる。もっと基本的なことを明らかにすることからはじめるほうが、問題の所在を具体的につかむためには近道らしい。そう考えると、シルクロードを中心とした地帯の自然環境を明らかにすることが、当面の課題として浮びあがってくる」と記している。

そして天山・崑崙山地の雪線の変動・古記録から推定される降水量の変動を明らかにし、シルクロード周辺の遺跡の分布の変遷を論じる。さらに内陸部の気候変動と渤海湾の海面変動とのかかわりにも論及している。保柳はこうも記している。「タリム盆地における歴史時代の自然の変化に関する最も有名な仮説は、ハンチントンの雨量脈動説である。このような仮説でいろいろな歴史的事件まで一挙に説明しようとする態度は賛成できないが、さればといてこの仮説の真意を理解しようとするにすぎないことは、むしろハンチントンの気候の毒なくらいである」と。

近年にいたってようやく歴史時代の気候変化が、人類史との

かかわりにおいて注目されはじめた。前島郁雄⁽⁸⁷⁾は、歴史学・気候学を総合した総観歴史気候学とでもいべき分野の必要性を提示している。

風土と宗教、自然観・世界観の研究

「歴史の展開は、常に風土の変化を伴っており、風土の変化のまったくないところに、そもそも人間の歴史的發展があり得るかどうかということは、想像することも不可能である」。これは鈴木秀夫の「超越者と風土⁽⁸⁸⁾」の書きだしの一節である。この一文は、戦後長らくリッター以来の環境論を蔑視し、歴史の舞台としての風土のもつ意味を小さなものとして取り扱ってきた地理学者に対する挑戦だと思った。これだけの言葉を投げつけないことには、風土への再認識の目をさますことができないほどに、戦後日本の地理学者（とりわけ一九六〇年代後半以降）は、地域論・空間論のドグマに落ち込んでいた。それは、鈴木⁽⁸⁹⁾の提示した風土史観をいち早く取り入れたのが、地理学者ではなく、むしろ歴史学者であったことは、このことを雄弁にもものがたっている。網野善彦や阿部謹也などの社会史学派は、歴史の理解における風土の重要性を理解しつつある。和辻以来の風土史観の伝統は、地理学よりも歴史学や考古学あるいは民族学の分野で華開こうとしている。鈴木がこの考えを提示したとき、地理学者の反応はむしろ冷やかでさえあった。

鈴木の研究の特色は、水河期以降の気候変動と人類史とのかかわり、とくに古代文明の盛衰を、ITCZの北上・南下にお

いて明らかにしたことにある⁽⁹⁰⁾。また、その研究はミノア文明の盛衰とサントリーニ火山の爆発との関係の研究⁽⁹¹⁾、さらにはこの時代の気候悪化にもなる民族の移動と言語分布の研究にまで及んでいる。そして鈴木のもう一つの特色は「森林の思考・砂漠の思考⁽⁹²⁾」に明白に示されているように、風土の相違に基づく人間の思考、とりわけ世界観や自然観の相異を論じたことである。それはキリスト教の陰影をつよくもつ西欧文明の人類史における位置や、森の民としての日本人の世界観・自然観の果すべき役割を考えなおす上において、きわめて現代的な意味をもっている。

戦後日本のアナル学派を排斥したフランス学派地理学に影響され、地域の微細な実証的研究をつみ重ねた人々の目には、地球の規模でのこうした気候と文明のかかわりの研究は、荒唐無稽とうつつたかもしれない。しかし、日本の経済成長のお陰で、大規模な海外学術調査が実施できるようになった。近年は中島健一⁽⁹³⁾や上野登⁽⁹⁴⁾によって古代文明の研究の紹介が行なわれている。メソポタミア文明・エジプト文明あるいはインダス文明の盛衰と自然環境の変遷とのかかわりを、欧米の研究事例⁽⁹⁵⁾の単なる紹介ではなく、日本人の手によって、それらを乗り越えるような仕事⁽⁹⁶⁾が着々と進められつつある。

森林破壊と文明の盛衰の研究

自然環境の変化が人類史に及ぼす影響とともに、人類による自然環境の改変を正面から取りあげたのは千葉である。自然環

境の中で、動・植物相は、人間の手によってもっとも容易に改変されやすい側面をもつ。こうした人間による森林破壊や大型哺乳動物とのかわりを、地理学の重要な研究課題として位置づけたのも千葉である。

その名著『はげ山の研究』の中で千葉は、「著者がこの研究で問題にしたいのは『はげ山はどうしてできたのか』である」⁽⁹⁷⁾しかし、その際ははげ山を「地域の構造部分としてとりあげる」⁽⁹⁸⁾ことを記している。その代表的事例として、瀬戸内塩業の発達と林地荒廃の関係や東濃の窯業地帯のはげ山の形成などがとりあげられている。はげ山を地域構造の指標とみなし、「地域に則した見方」⁽⁹⁹⁾が強く主張されている。瀬戸内や東濃のはげ山の成立の主たる原因を、製塩や窯業のための燃料伐採に求めるのではなく、製塩や窯業の発達による商品経済の浸透が、地域の農・山村の生活を窮乏させ、貧困な住民層が共有財産である入会林地から掠奪的な採取を行なったことに求めた。林地の荒廃を地域の矛盾形成としてとらえる視点が提示されている。はげ山のある地域が「どのような構造をもつか、あるいはこのような現象を起こす作用が、地域のいかなる性質にもとづくかといった方向に掘り下げて、はじめて地理学のみがもつ『地域に則した見方』が満足されるのである」⁽¹⁰⁰⁾としている。絶えざる変遷をとげる歴史の舞台としての自然と、さまざまな矛盾をかかえた人間社会とのかわりあいの動態的産物としてはげ山を位置づけ、その形成の原因を「人間社会の組織と経済構造が構成す

る地域の矛盾形成」⁽¹⁰¹⁾の中に求めようとする千葉の視点は、リッター以来の自然と人間の関係の科学としての地理学が、地域論の中にみごとに融合されている。はげ山の人類史における意味を、地域の矛盾形成としてとらえる千葉の視点は高く評価される。その視点は、筆者等による森林の荒廃が文明の盛衰に及ぼす影響の比較研究⁽²⁷⁾として、人類史・世界史の視点から地球の規模において論じる研究の中にも継承・発展されている。

しかし、ここで注記しておかねばならないことは、千葉に与っての地域とは、岩石圏から住民圏にわたる「生態学などで用いられる主体的環境に類似した概念」⁽¹⁰²⁾であることである。千葉は地域区分を地理学の究極の目的とはみていない。千葉の研究は、はげ山に代表される植生と人間のかかわりの研究のみでなく、大型哺乳動物⁽¹⁰³⁾から細菌とのかかわりの研究にまで及んでいる。千葉は自然と人間のかかわりの研究に正面からとりくみ、かつこれをこなし得るだけに自然に対し深い洞察力をもった数少ない人文地理学者であった。

保柳や鈴木のアプローチが、自然地理学からの人文地理的アプローチとしての性格を有しているのに対し、千葉のアプローチは、人間の社会や経済の分析から出発している点において人文地理学の自然地理的アプローチとも言えよう。その比重のおきかたは異なるが、自然と人間に同時に目を向けている点ではかわりない。

ハンチングトンへの対応

興味深いことは、この保柳・千葉・鈴木の三人とも、環境決定論の代表者として排斥されたハンチングトンの正当な評価の必要性を指摘している点である。保柳についてのハンチングトン論は、すでに述べた。千葉は川喜田のアジアの文化圏と気候環境との対比説との関連においてハンチングトン説を紹介し、「ハンチントンのそれも、川喜田教授の試論も、ひとしく地理学における自然研究の分野に含められるものがあり、このような研究の多様性が存在しうる点に、学問分野としての大きな将来性も横たわっているといつてよいであろう⁽¹⁰⁾」としている。また鈴木は「ハンチングトンの『気候と文明』論は、技術レベルにおいてではなく、考え方に根本的な問題があるのであるが、それでも人間と自然の関わりを考察するために、歴史的に重要な貢献をした。人類の歴史を自然環境の変化のなかでみるという視点を刺激してくれた⁽¹⁰⁾」と指摘している。

ハンチングトンの説の紹介につとめた西岡秀雄⁽¹⁰⁾の功績も忘れることはできない。西岡はハンチングトンの『文明の原動力』を訳す序で、「ハンチントンといえは、一口に文明の興廢の鍵は気候だと論ずる素朴な地理的決定論者の烙印を捺されてしまひ、正しい意味の人文地理学者ではないかの如き非難も受けてきた。しかし、彼は、気候だけが文明を左右する条件と考えたわけではなく、彼は気候も文明の興廢に關係する重要な一条件の一つであることを忘れてはならない点を強調していたので

ある⁽¹⁰⁾」と指摘している。

鈴木はこう指摘している、「ハンチングトンの説が現われた時、多くの人は晝齋でそれを読み、その説が及ぼすであろう影響を推察して、それを心情的に拒否した。しかし、砂漠の中の旧式のバスにゆられて走り、密林の瘴気を吸って旅行する人は、気候の人間に持つ意味に関心を持つようになる。そのような人がふえるにつれ、社会は地理学を求めようになるであろう⁽¹⁰⁾」と。現代はまさにそのような時代にさしかかりつつある。

大地と人類のかかわりの研究

風土論は主として風すなわち気候風土と人間とのかかわりに焦点があてられてこれまで論じられてきた。しかし、風土のもう一つを構成する土すなわち大地・地形と人間のかかわりの研究を推し進めてきた研究者がいる。それは平野地形の研究者である。

千葉と同じく人文地理学に籍をおき、自然と人間を同時にみてきたのは小野忠烈である。小野は、藤岡の先史地理学が、先史時代の地域性の認識と地域区分に究極の目標をおいたのに対し、藤岡の地域変遷史の立場に立脚しつつも、その終極の目的を「人類時代の過去の地理を究明する⁽¹⁰⁾」ことにおく考古地理学を提唱した。そして自らが考古学者として発掘調査を実施するとともに、遺跡の立地する自然環境の復元、なかんずく海岸平野の自然環境の復元研究にも着手してきた。遺跡を自然と人間のかかわりが凝縮したトータルな有機体としてとらえ、自然と

人間の両方にたえず目を配ってきた姿勢は、その一連の研究成果の中に結集されている。絶えざる変遷をとげる自然と人類の歴史のかかわりの実証的研究において考古地理学者としての小野の果たした役割は大きい。その功績については別稿で詳述したので参照されたい。

沖積平野は古くから人類の居住の舞台となってきたため、平野地形の研究者は、必然的に人類の居住とのかかわりを意識せざるをえなかった。平野の地形は人類の歴史とのかかわりにおいてとらえ得るだけに、変化の速度が早く、完新世の気候変化もその地形変化の中に記録されている。自然と人間のかかわりの歴史をもっともダイナミックにとり扱いやすい分野が、この沖積平野の研究であった。谷岡武雄・多田文男・西村嘉助・中野尊正・井関弘太郎・大矢雅彦・門村浩・日下雅義に代表される平野の研究が、つみかさねられた。それらの研究は自然史の解明に主力をおいたものではあるが、リッター以来の自然と人間の両方に同時に目を向けるという、関系の科学としての地理学の伝統が、かろうじて生かされている分野であると言えよう。

西村嘉助は「気候は、はじめから人間の自然環境としての面がとりあげられたのに対し、地形が環境としてどのように人間にはたらくかという点が、あまり明確にされていない点」を指摘し、人間の環境としての地形を研究する「応用地形学」を提唱した。

日下は「平野において展開される人間と自然との相互関係を

時系列においてとらえる」ことを試みた。その著の書き出しに「人間と自然環境との間の対話をはからない現代のような地理学は、必ずや一つの体系をもった科学としての生命を閉じるであらう」と指摘している。それは、自然地理と人文地理のビルの谷間を埋め、自然と人間の関係の科学としての地理学の再建への意気込みを示したものにほかならなかった。人間と自然の関係を引きわめて歴史的にとらえる視点からの具体的アプローチは、それにつづく『歴史時代の地形環境』の中に余すところなく語られている。

日下はまた日本で初めて「環境地理学」を提唱した。日下がその平野地形研究のなかで目ざしたものは、自然と人間の関係の科学としての地理学の総合化と再編成にはかならなかった。『図説環境地理』を著した福岡義隆も、地理学は自然と人間を総合的に把握するのが本来の使命であり、そうした総合化をめざすものとして環境地理学に挑戦すると記している。

多くの諸外国の文献紹介に終始しているように見られる近年のニュージエオグラフィを旨とする動きとは違って、着実な実証的研究と広範なフィールドワークに裏付けされた自然と人間の関係の究明と総合化を旨とする動向は、地味ではあるが、未来の風土論にとっては、かけがえのない重要な潮流として、継承・発展されなければならない。

外国人の研究

さらに近年の注目すべき動向としては、外国人の手によって、

日本文化風土論が展開され始めたことである。オギュスタン・ベルク (Augustin Berque 1942) の『風土の日本』⁽¹⁰⁾ は、外国人による日本の風土論としては、これまでになかった出色の著であろう。例えばベルクは日本では山は人の住まない所という一般的な定義が与えられていることに驚く。ちょうど和辻がイタリア半島の南端に着いて、山に平野と同じように草原が広がっているのを見て驚くのと全く逆の発見が、そこにはある。と同時にベルクの風土論は、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ⁽¹¹⁾ 以来の理性と科学至上主義に立脚した西洋人の風土論であることを、我々に強く実感させる。ベルクは筑波常治の風土論を「いいかげんな話題の山」と指摘し、鈴木秀夫の風土論を「科学主義の誤りを典型的に示している」と批判する。ベルクは日本人の直観的ありかたを否定し、西欧人のように論証的であることに最大の価値を置く。

しかし、今問われるべきは、この西洋の論証至上主義、科学至上主義なのである。ベルクの風土論は、ブラーシュ以来の人間中心の科学至上主義をいまだ脱却できていない。筑波や鈴木⁽¹²⁾ の風土論は、このベルクが正しいと信じて疑わない近代ヨーロッパ文明の科学への問いかけなのである。人間中心、理性中心の論証主義、科学至上主義には明白な限界があることに、ベルクは残念ながら気づいていない。

しかし、いつの日かベルクもこの点に気づいてくれることを期待したい。多くの日本の文献を読んだ努力には敬意を払うと

ともに、日本人の目ではなく、異質の風土の下に育った外国人による日本文化風土論が、このような形で今後大きく展開されることが期待されるのである。

心理学・生理学との接点

千葉は「今後の風土論は単なる意識の分野に止まらず、無意識面についても考察の手をのびさなくてはならない⁽¹⁵⁾」と記している。大脳生理学が解き明しつつある知覚や感覚のあり方が風土の認識にいかなる働きをもたらすか。あるいは言語や信仰の形成にいかにかかわっているか。さらには個体発達史の中での深層心理あるいは教育環境が、風土の認識といかにかかわっているかなどが今後の風土論の一つの重要な課題となろう。松田道雄⁽¹⁶⁾ がかつて指摘した皮膚のうちがわの自然としての精神の風土学が必要なのである。こうした無意識レベルにおける風土の知覚や認識の問題を生理学や心理学などの自然科学との連携の中で、文化論にまでいかに展開させるかは、今後の興味ある課題である。

和辻が重視した風土に対する直感が、生理学や心理学の実験を通して、実証的に解明されることが期待されるのである。

三、新たな地平

環境調和論の提唱

環境決定論にしる、環境可能論にしる、それらはいずれか一方を絶対的なものとし、自然と人間を対立的に把える機械論的

自然観に立脚していた。そして、絶えずキリスト教的世界観の陰影がつきまとう。ラッセルの環境論は、キリスト教の選民意識と結託することによって、侵略戦争の理論的支柱となりえ、環境可能論は、自然支配のキリスト教的自然観に裏づけられて、はじめて成立可能であった。そして、それらはマルクス主義の歴史観と同じく、西欧中心主義・人間中心主義の色濃い影を引きずっている。

機械論的自然観・自然支配の環境論が世界に蔓延する中で、自然と人間を一体として把握し、自然と調和・融合する有機体論的自然観は、長らく抹殺されてきた。そうした中で池見酉次郎が指摘することく「自然を生かし、己をも生かす」⁽¹⁷⁾有機体論的自然観は、東洋においてはぐくまれてきた。「東洋人は自己の自然を知るのみか、自己がどの程度にまで自然そのものであるかを知っている」⁽¹⁸⁾。

今西錦司と梅原猛

世界がいま環境破壊と核戦争の危機の中で、破滅の淵にさしかかっているかに見えるこの時代に、自然と人間を対立的にみるのではなく、調和と融合を求めようとする東洋的自然観・生命観に立脚した新たな環境論の構築が必要なのである。そして、その環境論に立脚した文明論、風土論の展開が、工業技術文明の物質至上主義の弊害を脱却し、新しい文明概念と世界像の創造のために、いま待望されている。自然と人間を対立的に把えるのではなく、自然と人間を同時に見、その間に調和と

融合をはかる環境論を、私は環境調和論と呼びたい。

こうした東洋的自然観に立脚した新たな科学を樹立したのは、今西錦司であった。今西の「すみわけ理論」⁽⁵⁵⁾や「進化論」⁽⁵⁶⁾は、自然界を西洋の競争の原理・闘争の原理ではなく、東洋の共存の原理で理解し説明しようとする試みに他ならなかった。今西の「自然学」⁽⁵⁷⁾は、東洋の自然と人間の間の相対主義や調和主義に立脚している。和辻と同じく今西も風土への直感を重視した。

人間中心主義の生命観に立脚したヨーロッパ哲学では、現代の混迷した自然と文明の危機に対処することには限界がある。そのことを明快に指摘したのは梅原猛であった。梅原は生きとし生ける物が夢をもてる生命観、東洋の「自然生命的存在論」に立脚した文明論を展開することの重要性を指摘した。梅原の日本文化論の展開は、東洋の生命観に立脚した新たな人間の科学を樹立する試みにほかならなかった。自然科学と人文科学という相違はあっても、そこには競争の原理・闘争の原理に立脚した西洋の自然科学ではなく、東洋の共存の原理に立脚した新たな自然科学を樹立しようとした共通の視点がある。ともに生きとし生けるものの共存関係の重要性が指摘されている。梅原は西洋の文明を「力の文明」、東洋の文明を「慈悲の文明」として位置づけた。⁽⁵⁸⁾梅原においても西洋の文明は競争心や闘争心がうずまいていく文明なのである。「力の文明」で人類の未来を切り開くことには、明らかに限界がみえてきた現代、梅原が指摘した東洋の生命観に立脚した新たな文明論、風土論の展開

が今ほど必要とされている時代は他にない。

生物学出身の今西と哲学出身の梅原が、科学と文明の未来に對してともに類似した結論に達している。私は二一世紀の科学を支える哲学の基本は、この二人の学問の巨人の思想の中の多くが胚胎されていると思う。

くりかえしてはならない誤ち

日本、あるいは東洋の自然觀に立脚した新たな環境論を構築し、その環境論に立脚した日本文化風土論を展開しようとする者にとって、警鐘の人として忘れてはならないのは、生理学者の橋田邦彦⁽¹³⁾の生き方であろう。吉仲正和⁽¹⁴⁾が紹介しているように橋田は神によって造られ、神によって生命を与えられた自然ではなくて、人間をはぐくみ、時としては神の宿るところでさえある自然を研究の対象とする「日本の科学」を樹立することを旨とした。その視点は、生理学にのみとどまらず現代の生態学や地理学など、自然と人間の關係にかかわる研究にたずさわるものに示唆を与えるところがある。東洋的自然觀に立脚した環境論を構築し、その環境論の上に人類史・世界史を再構築し、新たな世界觀・文明概念の創造をめざす者にとってはこの「日本の科学」の樹立を旨とした橋田がなぜ道を誤ったかを冷静に見極めなければならない。橋田において道を誤らせたのは、東洋的自然觀に立脚した「日本の科学」の樹立を、国家主義あるいは小民族主義に結びつけたことにある。我々はその轍を二度と踏んではならない。

現代の世相は、第二次世界大戦前夜の狀態と類似している点が多いことが危惧される。第二次世界大戦前夜と戦中には多くの風土論が世に問われている。日本の風景、とりわけ森の美しさを説き、日本人の自然に對する崇敬の念を日本精神の発揚の源とした地質学者脇水鉄五郎の『日本風景誌』⁽¹⁵⁾、自然のうちに神の働きを認め、樹木に神靈の宿ることを承認する気持は、古代以来、宮々と受け継がれてきた自然觀であり、遙かな古代の精神が生きてつづけていることの中に、日本人の自然觀の特殊性と恒久性を認めるとした歴史学者高瀬重雄の『日本人の自然觀』⁽¹⁶⁾、さらに日本人の森や植物を愛することを國民性の一つとし、直觀の鋭さを説き、温帯のめぐまれた風土の中で育成された國民性は、国土と皇室を守らんが為に忠誠勇武であると指摘する氣象学者藤原咲平の風土論⁽¹⁷⁾などがそれらを代表するものである。こうした風土論とともに、「自然はたしかに日本人の精神的苦惱に大きな救ひを与へて来た。しかしこの救ひは果して絶対の救ひであつたか。山里の境涯は果して一切の人間の無明を除き尽すだけの能力をそなへてゐたであらうか」と日本的なものの限界を明白に指摘し、アニミズム的段階は國民の精神生活を構成する重要な因子たりえないとして、人間中心主義の西洋文明の勝利を予見した風土論が歴史学者家永三郎⁽¹⁸⁾によって世に問われていることも記しておかなければならない。

第二次世界大戦中に、このように風土論が多く世に問われたのは、「日本の風土の認識」⁽¹⁹⁾を著した吉野によって指摘されて

いるように、日本的なものを見直そうとするこの時代の精神が強く反映した結果であろう。そして時代の情勢は変わった。国際化、地球時代の到来の中で、再び日本的なものを見直しの機運が高まってきている。その意味において、現代の世相は確かに第二次世界大戦前夜の状態と類似しているのである。

日本人の自然観に立脚した新たな風土論の樹立が、第二次世界大戦中の地政学や環境決定論と同じ轍を踏まないために、あるいは最近流行の日本人論が、国粹主義と同じような誤りをおかさないためには、人類と地球の平和と幸福のために寄与するという人類主義・地球主義と相手の立場を重んじる東洋の相對主義を貫くことが、ぜひとも必要である。吉野は、いずれの風土論にもひとつの思想的立場が常に必要であると指摘している。二一世紀の未来の地球環境と文明のゆくえを救済しうる風土論の思想の根底をなすものは、ユニバーサルイズムとヒューマニズムに裏づけされた東洋の相對主義でなければならぬ。そして、もう一つ風土論を研究するにあたって肝に銘じておかなければならないことがある。それは石田英一郎⁽¹³⁾によって指摘されているように、風土論は現実には地理的決定論、環境決定論の性格をぬぐえないのではないかという批判である。風土論の研究者がおうおうにして地理的決定論に走りやすい危険性を内包していることには十分に注意を払わなければならない。歴史や文化における風土の役割には、明白な限界が存在することを、我々は肝に銘じておかねばならないのである。

石田⁽¹³⁾は日本文化研究において考慮されるべき要因として、人種・国家・風土・生業・世界観・言語・社会構造・歴史の八項目を上げている。この日本文化研究に対する枠組は、現代においても、おおむね正しいと言えよう。

原点への回帰

自然と人間を一体的なものと見、その間に調和と融合をはかろうとする有機体論的自然観は、なにも東洋の独占物ではない。それに類似した思想は西洋にもあった。一六〇一七世紀のマニファクチュアの隆盛を契機とする社会的諸変動の中で、自我の確立と新しい市民的世界像が形成された⁽¹⁴⁾。とりわけ一八世紀後半の産業革命の普及による豊かさの中で機械論的自然観と進歩史観が、大きな影響力を及ぼし始めた。その中でその反動として出現したヘルダー(J. G. von Herder 1744~1803)の「歴史哲学」⁽¹⁵⁾の中には、有機体論的自然観に立脚して世界史を論じる視点がみられる。もっともその歴史哲学の背景には、やはりキリスト教の強い束縛を感じずにはおれないが、「世界は一般に進歩改善して行くというのは小説にすぎず、すくなくとも歴史の眞の研究者はこれを信じない⁽¹⁶⁾」と当時、ヨーロッパを支配しつつあった進歩史観に正面から反論している。ヘルダーがめざした世界史観は、地球の誕生・生命の誕生から記述がはじまっている。そして地球を一大工場としてとらえ、人類の歴史との関係において動植物界がとりあげられる。そこでの地球は「大地も空気も水も生物も、芸術えい智の一つの主要な組織にした

がい、これにいたらんとする思想工夫の倉庫⁽¹⁸⁾」なのであった。

彼は比較解剖学・生理学の知見から、人類とそれをとり囲む自然界の、大構造との比較研究を行ない、風土が身体や精神の形成に及ぼす影響、人類史の風土化を論じている。そして人類の幸福は風土性に強く根ざしており、幸福は自然風土これに存在するととく。さらに「すべての大陸の住民は幸福に生活しようとするならばヨーロッパ人であらねばならぬという自慢は、無意味な自負である」とヘーゲル (G. Hegel, 1770-1831) やマルクス (K. Marx, 1818-1883) においても止揚することができなかった西欧中心史観にも反省をせまっている。

野間三郎⁽³⁵⁾や水津一朝⁽³⁶⁾によって指摘されている如く、リッターはこのヘルダーを代表とする時代の精神によく影響されたという。リッターは自然と人間を対立的に把握するのではなく、自然と人間を一個の有機的全体として把握する視点を展開する⁽¹⁵⁾。彼のめざした地理学は、絶えざる変遷をとげる歴史の舞台としての自然と人間の歴史とのかかわりあいであった。リッターは

西川治によれば、「歴史学は諸民族の運命について考察する場合、その土地にはほんの一べつを投げかけるにすぎない。しかし、地理学は土地の自然から出発し、民族の運命について真剣に問いかける」と指摘する。大地の自然は、国家や民族の歴史の展開にとって何であつたか、そして現代においては何物でありつづけるのかを問ひかけることが地理学であるとしている。リッターにとつての地理学とは、人類史の歴史の舞台としての

大地と人間のかかわりあいの実証的研究にほかならなかつた。こうしたリッターの地理学の視点を、歴史学の地理学的研究にすぎないとか、歴史学の補助科学に甘んじているとして、地理学のかたすみに押し込めてきたのが、戦後日本の地理学ではなかつたか。

二〇世紀末の今日、有限の地球という空間の中で、自然とそこに生活する人間とが、いかに生きのびるかが真剣に問われているときほど、このリッターの自然と人間に同時に目を向ける視点が必要とされている時代は、ほかにない。今、地理学者は、地理学の祖リッターにもう一度学ぶとともに、原点に立ち返ることが必要ではないだろうか。

地理的文明論と風土論

二〇世紀の前半は、二つの世界大戦によって象徴される激動の時代であつた。この激動の時代に生きた地理学の巨人は、西洋文明の旗手達でもあつた。中央アジアを探険したスウェーデンの地理学者スウェン・ヘディン (A. S. Hedin, 1865-1952)、中央アジアからインダス文明の考古学・地理学の調査を実施したイギリスのオウレル・スタイン (A. Stein, 1862-1943)、ドイツ景観論の地理学を樹立したローベルト・グラードマン (R. Gradmann, 1865-1950) やオットー・シュリーター (O. Schlieter, 1872-1950) も、シュペングラヤハンチングトンと同世代の人々であつた。

これらの学問の巨人達は、人生の中で最も充実した時代に第

一次世界大戦を体験し、第二次世界大戦の前後に世を去っている。そして、不幸なことにグラードマンとシュリーターを除いて、彼らの科学的業績には、侵略戦争の色濃い影がたえずつきまとう。シュベングラは晩年国家主義者に、ヘディンはナチスの党員になった。そしてハンチングトンの仕事は侵略戦争と人種の偏見をぬきにしては語れなかった。彼らは時代の申し子であった。第二次世界大戦の終了とともに、人種の偏見にみちたハンチングトンの気候と文明の研究は、地理学から排斥されてしまった。それだけではない。古代ギリシア以来の地理学の本質的でもっとも興味ある気候と文明の研究、風土論がアンタツチャブルなものとして位置づけられてしまった。

そしてドイツの片田舎でこつこつと練りあげられたグラードマンやシュリーターの景観論が、地理学の主流の一つとして、もてはやされるようになった。この景観論は地域論、空間論の発展をもたらし、現代に至っている。

だが、時代の情勢は大きく変わりつつある。地球時代の到来の中で、世界的視野に立った新たな地理学の樹立が待望されている。ドイツの片田舎で練りあげられた思想でもって、地球時代の地理学を運行していくには、明らかに限界が見えてきた。ハンチングトンの視野は、ドイツの地方都市にこもって南ドイツ地誌を書きつづったグラードマンより、はるかにスケールが大きなものであった。

二〇世紀の地理学はグラードマンやシュリーターによって代

表されるドイツ景観論によって新たな時代を迎えたことは事実である。しかし、もう一つ忘れてはならない重要な潮流があったのではないだろうか。地理学における環境論を基礎とした地理的文明論、風土論の潮流である。地球時代の到来の中で、この地理的文明論、風土論は再び脚光をあび始めた。人種の偏見や侵略戦争の亡霊を取り払うことによって、装いを新たにした地理的文明論、風土論は、必ずや未来の地球時代の科学に大きく貢献するにちがいない。

未来に向かつて

二〇世紀を開拓した西洋の学問の巨人達がまだまだ健在であった時、和辻は渡欧した。そして名著『風土』を著した。しかし、この和辻によって先鞭がつけられた風土論も、第二次世界大戦後、急速に衰退した。

日本文化風土論の研究に着手する前に、どうしても整理し、明白にしておかねばならないことが私にはあった。何故、和辻によって先鞭がつけられた東洋的風土学の発展が、第二次世界大戦の敗戦を境に、頓挫したかを見極める必要があった。それなくしては、安易にこの課題に着手することは危険であった。国家主義、小民族主義の亡霊が渦巻いていたからである。第二次世界大戦中、日本文化風土論は国家主義、小民族主義の亡霊に飲み込まれてしまった。そしてこの魅力ある自然と人間の関係の科学の発展は頓挫した。

しかし、その亡霊を吹き払い、地球主義とでも言うべきユニ

パーサリズムとヒューマニズムの大地にしつかりと立脚し、東洋の相対主義^(地)を思想の根底に位置づけた時、風土論はこの混迷した地球の自然と人類文明の危機を救済しうる可能性をもった新たな学問分野たりうる。地球時代の文明論を牽引する有力な分野たりうる。

戦後、環境決定論を排斥する嵐の中で、人類に対する自然環境の影響の重要性を見失うことのなかった少数の地理学者がいた。その地理学者の中に、和辻の風土論はほそぼそとながら継承されてきた。しかし、地球時代の到来の中で、グローバルリズムと国際化がいやおうなくおしよせ、地球環境と文明のゆくえに暗澹たる未来が見えはじめた時、自然と人類に同時に目をむけてきたこうした地理学者の研究の重要性が再認識されはじめた。風土論の重要性が再認識されはじめたのである。日本文化風土論は、地球環境と文明のゆくえを見通し、未来の自然と人類を救済する新たな地平に向かって、再出発した。

〔付記〕本稿の文献資料収集に際しては、国際日本文化研究センター資料課のご助力を得た。記して厚くお礼申し上げます。

文献

- (1) オスヴァルト・シュベングラ―(松村正俊訳)『西洋の没落1、2』五月書房 一九七七年
(2) Huntington, E.: *Civilization and climate*. Yale Univer-

sity Press, New Haven, 1915.

- (3) Toynebe, A. J.: *A study of history*, Vol. I - XII. Oxford University Press, 1934-1961.

(4) 千葉徳爾『地域と自然』大明堂 一九六六年 一頁

(5) 一九八三年二月二〇日に、比較文明学会が創立された。

(6) フリストテレス(山本光雄訳)『政治学』岩波文庫 一九六一年

(7) 西川治『人文地理学入門』東京大学出版会 一九八五年

(8) ドイツの地理学者で環境決定論の代表者とみなされるが、彼の地理学が環境決定論かどうかは再検討の余地がある。ラッツェルの環境論はヘルダーの有機体論的自然観に裏づけられていた。大地の自然は国家や民族の歴史的發展にとって何であつたかを追いもとめ、歴史の舞台としての大地の研究の重要性を指摘した。ラッツェルの地理学については水津一朗『近代地理学の開拓者たち』地人書房 一九七四年、ヨハネス・シュタインメツラー(山野・松本訳)『ラツェルの人類地理学』地人書房 一九八三年などがある。

(9) Ratzel, F.: *Anthropogeographie*, Teil 1, Teil 2, Stuttgart, 1882, 1891.

(10) 能登志雄『気候順応』古今書院 一九六六年

(11) ハンチントン(間崎万里訳)『気候と文明』岩波文庫 一九三八年

(12) 前掲注(10) 一頁

(13) 和辻哲郎『風土―人間学的考察―』岩波書店 一九三五年初版 一九七四年第四一刷版

- (14) 前掲注(13) 二五頁
- (15) 千葉徳爾『風土論・生気候』 気候と人間シリーズ三 朝倉書店 一九七九年 三九頁
- (16) 安田喜憲『モンスーン大変動』 科学五七 岩波書店 一九八七年 七〇八―七二五頁
- (17) 安田喜憲『五〇〇年前の気候変動と古代文明』 科学五八 岩波書店 一九八八年 四六八―四七六頁
安田喜憲『インダス文明の盛衰と縄文文化』 日本研究一 一九八九年 二〇五―二七二頁
- (18) 梅原猛『美と宗教の発見』 筑摩書房 一九六七年
- (19) 前掲注(13) 一一〇頁
- (20) 前掲注(13) 四六頁
- (21) 和辻哲学における『自然生命的存在論』の認識の欠如を指摘した梅原は、アニミズムの再認識の重要性を指摘する。
梅原猛『日本冒険一・二』 角川書店 一九八八年、梅原猛『日本人の「あの世」観』 中央公論社 一九八九年、梅原猛『アニミズム再考』 日本研究1 一九八九年などでアニミズムの人類史における再認識の重要性が指摘されている。
- (22) 安田喜憲『世界史のなかの縄文文化』 雄山閣出版 一九八七年
- (23) 前掲注(13) 六四頁
- (24) 安田喜憲『気候と文明の盛衰』 朝倉書店 一九八九年
- (25) 前掲注(13) 六九頁
- (26) 安田喜憲『東西二つのブナ林の自然史と文明』 梅原猛ほか『ブナ帯文化』 思索社 一九八五年
- (27) 安田喜憲『森林の荒廃と文明の盛衰』 思索社 一九八八年
- (28) 前掲注(13) 一一〇頁
- (29) 自然を恐れず自然を克服しようとする分析的な自然科学の発達がヨーロッパの風土と深くかわっているという指摘は和辻と同世代の寺田寅彦『日本人の自然観』 寺田寅彦全集第5巻、岩波書店 一九八五年にも記されている。
- (30) 前掲注(13) 一一〇頁
- (31) 和辻哲郎『人倫の世界史的反省序説』 思想二七三 岩波書店 一九四六年 一頁
- (32) ブライシュ(飯塚浩二訳)『人文地理学原理上』 岩波文庫 一九四〇年
- (33) 前掲注(13) 二四二頁
- (34) 前掲注(22) 一三一―一九頁に一部既報
- (35) 野間三郎『近代地理学の潮流』 大明堂 一九六八年 六五頁
- (36) 水津一朗『近代地理学の開拓者たち』 地人書房 一九七四年 一九頁
- (37) 飯塚浩二『地理学方法論』 古今書院 一九六八年 九〇頁
- (38) 前掲注(37) 一一六三頁に再録
- (39) 前掲注(37) 八一―三七頁に再録
- (40) 前掲注(37) 八三―一一頁に再録
- (41) 前掲注(37) 七二頁に再録
- (42) 前掲注(37) 一〇七頁に再録

- (43) 沼田真『生物学論』白東書院 一九四八年
- (44) 岡田俊裕「戦後初期における飯塚浩二の言語活動上」地理科学三四 一九八〇年 三三三頁
- (45) 飯塚浩二『地理学と歴史』古今書院 一九六六年 一八頁
- (46) 前掲注(45) 一八頁
- (47) 野間三郎「地理的環境論の展開」辻村太郎編『新地理学講座第二卷 地理学本質論』一九五五年 一六八—一八二頁
- (48) J・マイヤー、R・ペスラー、K・ルッペルト、F・シヤフアー(石井・水岡・朝野訳)『社会地理学』古今書院 一九八二年
- (49) 西村嘉助『開発地理学』大明堂 一九七一年 三頁
- (50) 能登志雄「地誌学」木内・西川編『朝倉地理学講座—地理学本質論』朝倉書店 一九六七年 一七六—二一〇頁
- (51) オイガナイザー・西川治・川本忠平「地域振興と地理学」地理学評論五九 一九八六年 一〇八—一二二頁
- (52) 野澤秀樹「地理学の伝統と将来」地理三二 古今書院 一九八七年 三八—四三頁
- (53) 藤岡謙二郎「先史地域及び都市域の研究—地理学における地域変遷史的研究の立場—」柳原書店 一九五二年
- (54) 前掲注(53) 六三—六四頁
- (55) 今西錦司『生物社会の論理』毎日新聞社 一九四九年、後に『今西錦司全集4』講談社 一九七四年に所収
- (56) 前掲注(55) 一〇頁
- (57) 前掲注(55) 二二—二四頁
- (58) 辻村太郎編『新地理学講座第二卷、地理学本質論』朝倉書店 一九五五年
- (59) 野間三郎・堀川侃「環境論」辻村太郎編『新地理学講座第二卷、地理学本質論』朝倉書店 一九五五年 一六八—二〇八頁
- (60) 前掲注(59) 一八四頁
- (61) 前掲注(59) 二〇七頁
- (62) 前掲注(59) 二〇六頁
- (63) 前掲注(59) 二〇九頁
- (64) 多田文男・石田龍次郎編『現代地理学講座—自然と社会—』河出書房 一九五七年 三二—三八頁
- (65) 西村嘉助「環境としての自然」多田・石田編『現代地理学講座—河出書房 一九五七年 五頁
- (66) 木内信蔵・西川治編『朝倉地理学講座—地理学総論』朝倉書店 一九六七年
- (67) 堀川侃「地理的環境」木内・西川編『朝倉地理学講座—地理学総論』朝倉書店 一九六七年 一四—一七五頁
- (68) 前掲注(50) 一八四—一八五頁
- (69) 浮田典良編『総観地理学講座九 人文地理学総論』朝倉書店 一九八五年
- (70) 前掲注(69) 三頁
- (71) 梅棹忠夫「文明の生態史観序説」中央公論二月号 一九五七年のちに梅棹忠夫『文明の生態史観』中央公論社 一九六七年に再録

- (72) 今西錦司編著『大興安嶺探検』講談社 一九七五年(復刻版)
- (73) 川喜田二郎『鳥葬の国』講談社文庫 一九七四年
川喜田二郎『ネパール王国探検記』講談社文庫 一九七六年
- (74) 川喜田二郎『素朴と文明』講談社 一九八七年
- (75) 中尾佐助『農業起源論』吉良・森下編『自然・生態学的研究』中央公論社 一九六七年、中尾佐助『現代文明二つの源流―硬葉樹林文化と照葉樹林文化』朝日選書 一九七八年
- (76) 川喜田二郎『野外科学の方法』中公新書 一九七三年 一八五頁
- (77) 佐々木高明『照葉樹林文化の道―ブータン・雲南から日本へ―』NHKブックス、一九八二年、佐々木高明編『日本農耕文化の源流』日本放送出版協会 一九八三年
- (78) 飯沼二郎『農業革命論』未來社 一九五六年
飯沼二郎『風土と歴史』岩波新書 一九七〇年
飯沼二郎『世界農業文化史』八坂書房 一九八三年
- (79) 三沢勝衛『風土産業』古今書院 一九五二年(新装版)
- (80) 吉野正敏『風の世界』東京大学出版会 一九八九年
- (81) 前掲注(10) 二二―二四頁
- (82) 前掲注(10) 三六頁
- (83) 保柳睦美『北支・蒙古の地理』古今書院 一九三三年
保柳睦美『シルク・ロード地帯の自然の変遷』古今書院 一九七六年
- (85) 前掲注(84) 二四頁
- (86) 前掲注(84) 四四頁
- (87) 前島郁雄『歴史時代の気候復元―特に小氷期の気候について―』地学雑誌九三 一九八四年 一一七頁
- (88) 鈴木秀夫『超越者と風土』大明堂 一九七六年
- (89) 網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』岩波書店 一九八四年 阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』平凡社 一九七四年
- (90) 鈴木秀夫『氷河期の気候』古今書院 一九七七年
- (91) 鈴木秀夫『気候と文明』鈴木・山本著『気候と文明・気候と歴史』気候と人間シリーズ四 朝倉書店 一九七八年 三一―六九頁
- (92) Suzuki, H.: 'World distribution of Basic Words (1) - Climatic change and Language', *Bull. Dept. Geogr. Univ. Tokyo*, 14, (1982): 29-63.
- (93) 鈴木秀夫『森林の思考・砂漠の思考』NHKブックス 一九七八年
- (94) 中島健一『古オリエント文明の発展と衰退』校倉書房 一九七三年、中島健一『河川文明の生態史観』校倉書房 一九七七年、中島健一『灌漑農法と社会―政治体制』校倉書房 一九八三年
- (95) 上野登『人類史の原風土』大明堂 一九八五年
- (96) 例えば中島や上野の研究は Butzer, K. W., *Environment and Archaeology-An ecological approach to prehistory*-, Aldine, Atherton, Chicago, 1971 によらるが、あわせて大

きい。

- (97) 千葉徳爾『はげ山の研究』農林協会 一九五六年 二五頁
- (98) 前掲注(97) 二六頁
- (99) 前掲注(97) 二四頁
- (100) 前掲注(97) 二四頁
- (101) 前掲注(97) 二二六頁
- (102) 前掲注(4) 二六頁
- (103) 千葉徳爾『狩獵伝承』法政大学出版局 一九七五年
- (104) 前掲注(4) 一一頁
- (105) 前掲注(91) 一一頁
- (106) 西岡秀雄『気候七〇〇年周期説—寒暖の歴史—』好学社 一九七二年
- (107) E・ハンチントン(西岡秀雄訳)『文明の原動力』実業之日本社 一九五〇年 八頁
- (108) 鈴木秀夫『ハンチントンとイタイイタイ病』地理一八古今書院 一九七三年
- (109) 小野忠熙『日本考古地理学』ニュー・サイエンス社 一九八〇年 一三頁
- (110) 小野忠熙編著『島田川』山口大学島田川遺跡学術調査団 一九五三年 小野忠熙編著『高地性集落の研究—資料篇—』学生社 一九七九年 小野忠熙『高地性集落論』学生社 一九八四年 小野忠熙『山口県の考古学』吉川弘文館 一九八五年 小野忠熙『日本考古地理学』大明堂 一九八六年
- (111) 小野忠熙博士退官記念論文集編集委員『小野忠熙博士と考古地理学』(北川健次他編『高地性集落と倭国大乱』雄山閣出版 一九八四年
- (112) 谷岡武雄『平野の地理』古今書院 一九六三年、谷岡武雄『平野の開発』古今書院 一九六四年
- (113) 多田文男『自然環境の変貌』東京大学出版会 一九六四年
- (114) 西村嘉助編『応用地形学』大明堂 一九六九年
- (115) 中野尊正『日本の平野』古今書院 一九五六年
- (116) 井関弘太郎『三州』朝倉書店 一九七二年
- (117) 大矢雅彦他『阿智野川水害地形分類図』建設省 一九八四年、大矢雅彦他『常呂川水害地形分類図』北海道開発局 一九八五年
- (118) Kadomura, H. (ed.); *Natural and man-induced environmental changes in tropical Africa*, Graduate School of Environmental Science, Hokkaido University, 1984.
- (119) 日下雅義『平野の地形環境』古今書院 一九七三年
- (120) 前掲注(114) 二頁
- (121) 日下雅義『歴史時代の地形環境』古今書院 一九八〇年 八頁
- (122) 日下雅義『環境地理への道』地人書房 一九七五年
- (123) 福岡義隆『図説環境地理』古今書院 一九八〇年
- (124) オギエスタン・ベルク(篠田勝英訳)『風土の日本』筑摩書房 一九八八年
- (125) 筑波常治『米食・肉食の文明』NHKブックス 一九六

九年

- (126) 松田道雄「精神の風土学」思想二・三 岩波書店 一九四九年
- (127) 池見西次郎「セルフ・コントロールの医学」NHKブックス 一九七八年 一四頁
- (128) 前掲注(126) 二七頁
- (129) 今西錦司「私の進化論」思索社 一九七〇年、今西錦司『自然学の提唱』講談社 一九八四年
- (130) 梅原猛「日本文化論」講談社学術文庫 一九七六年
- (131) 梅原猛「文明への問」集英社文庫 一九八六年
- (132) 橋田邦彦「正法眼蔵釈意」第一巻、第二巻 山喜房仏書林 一九三九年 一九四〇年
- (133) 吉仲正和「科学者の発想」玉川大学出版部 一九八四年
- (134) 脇水鉄五郎「日本風景誌」河出書房 一九三九年
- (135) 高瀬重雄「日本人の自然観」大八州出版 一九四二年
- (136) 藤原咲平「気象感触」岩波書店 一九四二年
- (137) 家永三郎「日本思想史に於ける宗教的自然観の展開」創元社 一九四五年
- (138) 吉野正敏「日本の風土の認識」『日本科学史大系一巻』第一法規出版 一九六八年 三二九—三五六頁
- (139) 石田英一郎「日本文化論の理論的基礎」『人間と文化の探求』文芸春秋 一九七〇年 六一—七七頁
- (140) フランツ・ボルケナウ(水田・山田他訳)『封建的世界像から市民的世界像へ』みすず書房 一九六五年
- (141) ヘルデル(田中・川合訳)『歴史哲学』第一書房 一九

三三年

- (142) 前掲注(141) 三八頁
- (143) 前掲注(141) 一九九頁
- (144) 前掲注(141) 四八八頁
- (145) Ritter, C.; Die Erdkunde im Verhältnis zur Natur und zur Geschichte des Menschen, oder allgemeine, vergleichende Geographie als sichere Grundlage des studiums und Unterrichts in physikalischen und historischen Wissenschaften. Berlin. Th. 1. XX, 1817. 832p. Th. 2. 1818. XVIII, 939p.
- (146) 前掲注(7) 三二頁
- (147) 地理思想における東洋の相対主義の重要性については、前著(注22)にて詳述した。